2015/11/17→11/23→12/4→2016/2/10→2/16→3/24→5/12→5/15→6/4→6/15→6/29
→7/16～8/24→8/28～9/29→9/30～10/16→10/17～11/4→11/5～11/17→11/18～11/23
→11/24～11/29→11/30～12/2→18 回目 12/3～12/11(終了)、2017/11/18 ヲシテ追加

ホツマツタヱ講座

ホツマツタヱ 4アヤ(綾) 解説文

ホツマツタヱ研究家 吉田六雄

4アヤ(綾)【件名】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
	ホツマツタヱミハタノヨ	ホツマツタヱ御旗の四
	ヒノカミノミヅミナノアヤ	日の神の瑞御名のアヤ(綾)

ホツマツタヱ本文

4アヤ(綾)1(1 行)～2(4 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		モロカミノ	カミハカリナス	諸神の	神議りなす
		タカマニテ	オオモノヌシガ	高天にて	大物主 が
		ヒノカミノ	ヰミナノアヤオ	日の神の	ヰミナのアヤお
		モロニトフ	オオヤマスミノ	諸に問ふ	オオヤマスミの
		コタエニハ	ミオヤノシルス	答えには	御祖の記す
		こウタニアリ	モロカミコエハ	歌にあり	諸神請えば
		ヤマスミガ	ツツシミ イワク	ヤマスミが	謹しみ曰く

語句の解説

・日の神→ワカヒト・アマテル神のことのこと、・議り→(訓)はかり、話し合い、
・大物主→初代(クシキネ)、・オオヤマスミ(疑問に解説あり)

原文の現在訳

諸神の 神議りなす 高天にて 大物主が 日の神の ヰミナのアヤお 諸に問ふ オオヤマスミの 答えには 御祖の記す 歌にあり 諸神請えば ヤマスミが 謹しみ曰く

【疑問】

オオモノヌシが、「日のカミ(神)の ヰミナのアヤお 諸に問ふ」ているが、それに答えた人はオオヤマスミと記述されております。その時のオオヤマスミは、何代目だったでしょうか?

【疑問に応える】

この文章よりオオモノヌシ（大物主・クシキネ）は、日の神（アマテラス神）より若年であることがわかる。またタカマでの諮りごとは、オオモノヌシ（大物主・クシキネ）が活躍した24～25鈴であり、この文脈より推定すると、そのことに答えた人は、日のカミ（神）の生まれた時のことをよく知る六代目の谷のサクラウチ（オオヤマスミ）になります。

（ご参考） オオヤマスミ系とオオモノヌシ系の相対関係

NO,	オオヤマスミ系	モノヌシ系	
1	6代目・サクラウチ	初代・クシキネ	2代目・クシヒコ
2	7代目・オオヤマカグスミ	2代目・クシヒコ	
3	8代目・オオヤマスミ	2代目・クシヒコ	3代目・ミホヒコ
4	9代目・カクヤマオキミ	3代目・ミホヒコ	4代目・カンタチ
5	10代目・ミシマミゾクイ	3代目・ミホヒコ	4代目・カンタチ
6		5代目・フキネ	
7		6代目・ワニヒコ	

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

アマテル神が居られます伊雑宮のある日のことです。諸神たちはアマテル神の御前にて神議りをなさっておられます。また、諸神が神議りされる伊雑宮は今で云う政庁になり、古の当時は高天と云っておりました。その高天の神詢りしている最中にて、アマテル神の末の弟であるスサノオには、長男のクシキネがいました。そのクシキネは、後に初代のオオモノヌシをアマテル神より拝命されました。

その初代の大物主が日の神（アマテル神）の斗ミナ（実名）のアヤ（綾）の謂れお、諸神たちに問ふておられました。その頃、すでに六代目のオオヤマスミは、うおや（大親）翁の身分になっておられましたが、そのことに関して、六代目のオオヤマスミは日の神のことをお話されました。その答えには、古代日本が始まった頃の神である天御祖神のことを記すワカ歌の書物の中に日の神の斗ミナ（実名）の謂れが記述してありますと申されました。

そのことに関して、諸神たちは早速教えて下さいと請えば、うおや（大親）翁の六代目のヤマスミが、日の神の謂れを謹しみながら曰く（話を始められました。）

4アヤ(綾)3(1 行)～4(3 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		ムカシコノ	クニ トコタチノ	昔、この	国常立の
		ヤクタリゴ	キクサオツトノ	八降り子	木草お苞の
		ホツマクニ	ヒガシハルカニ	ホツマ国	東遥かに
		ナミタカク	タチノホルヒノ	波高く	立ち昇る陽の
		ヒタカミヤ	タカミムスビト	日高見や	タカミムスビと
		クニスベテ	トコヨノハナオ	国統べて	常世の花お
		ハラミヤマ	カグヤマトナス	ハラミ山	香具山となす

語句の解説

・国常立→初代アマカミ(天神)、・苞→土地の産物、旅のみやげ、・ホツマ国→磯輪上秀真国

・日高見→仙台一円にあった古代国、・統(ス)べる→統轄する、・常世の花→橘の花(5-5 アヤ)

・ハラミ山→富士山の古名

原文の現在訳

昔、この　国常立の　八降り子　木草お苞の　ホツマ国　東遥かに　波高く　立ち昇る陽の　日高見や　タカミムスビと　国統べて　常世の花お　ハラミ山　香具山となす

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

この話は、昔、この国を起こされた初代アマカミ(天神)の国常立の御世のことです。トホカミヱヒタメの八っの国に天降りされるクニサツチの皇子は、木の実、草の実お苞(土地の産物、旅のみやげ)としてそれぞれの国に天降りされました。

特に、ホのクニサツチ国が天降りされた国は、後にホツマ国と呼ばれるようになりました。また、常世国の東の地方(国)は、大海原に面し海が荒れると遥かに波が高くなります。反対に、晴れた日は一転し大海原より朝日が立ち昇る陽の希望に溢れた地方(国)でした。

このことが元になり古くから日高見やとの呼び名が起こり、東の常立と呼ばれた初代タカミムスビと(は)、日高見の国を統べて(統轄されて)、橘の花を常世の花お(と)制定されました。一方、ホツマ国では、ハラミ山を香具山となす(されました。)

4アヤ(綾)4(4 行)～6(3 行)【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
	ヰモツギノ　マサカキモウヱ	五百継ぎの　マサカキも植ゑ
	ヨヨウケテ　ヲサムヰツヨノ	世々受けて　治む五代の
	ミムスビノ　ヰミナタマキネ	ミムスビの　ヰミナタマキネ
	モトアケオ　ウツスタカマニ	モトアケお　遷す高天に
	アメミオヤ　モトモトアナレ	天御祖　モトモトアナレ
	ミソフカミ　マツレバタミノ	三十二神　祀れば民の
	トヨケカミ　ヒカシノキミト	トヨケ神　東の君と
	ミチウケテ　オオナメコトモ	道受けて　大嘗事も

語句の解説

・五百継ぎ→マサカキが途中に枯れ沢山継ぎたしたとの意味→五百継ぎ(疑問に解説あり)、
・世々→多くの世、五代→タマキネ、・ミムスビ→タカミムスビ、・東の君→常世国の東の国の君、
・モトアケ→アワ歌 48 音円形図。フトマニ図、・モトモト→元基・トホカミヱヒの八神、
・アナレ→天並・アイフヘモオスシの神、・大嘗事→天皇が即位後初めて行う新嘗(にいなめ)祭。
・三十二神（読み順）
　内3円・・ヤハキチヌムエネコオヨソユツヰナの16神
　外4円・・マラニリウクテセケレロノンルサワの16神、

原文の現在訳

五百継ぎの　マサカキも植ゑ　世々受けて　治む五代の　ミムスビの　ヰミナタマキネ　モトアケお　遷す高天に　天御祖　モトモトアナレ　三十二神　祀れば民の　トヨケ神　東の君と　ミ道受けて　大嘗事も

【疑問】

五百継ぎについて、2アヤ(綾)では、「五百に満る頃の訳文」の中に「・・・(前略)・・・具体的な本数がわからず、古代の沢山の言葉である「五百」に満る頃と記述されたと解釈されます。」と記載されておりますが、未だ世間では、「マサカキを五百本も植え替えた」と思っているようです。五百継ぎを「古代の沢山の言葉」とした、更なる根拠はあるでしょうか。

【疑問に応える】

「五百」の言葉が使用されている2アヤ(綾)と4アヤ(綾)の例を比較して見ました。すると、同じ「五百」ですが、2アヤ(綾)の記述は、四代のアマカミ(天神)のウビチニ、スビチニの頃になり、4アヤ(綾)での記述は、五代のタカミムスビの「タマキネ(豊受神)」の頃になります。トヨケ(豊受神)は、7代アマカミ(天神)のタカヒト(イサナギ)の義理の父であり、イサコ(イサナミ)の実父です。

そこで、下表にアマカミ(天神)とタカミムスビの系図を比較して見ますと、自ずとウビチニとタマキネとの間には、約3代の違いがある所から、当然、マサカキの植ゑ継ぎ本数も違うと思われます。だが、いずれも「五百」と記述されており、このことはマサカキの本数を正確に記述しているのでなく、抽象的にマサカキの植ゑ継ぎ本数を表わしていることがわかって来るかと思います。

表　アマカミ(天神)とタカミムスビの系図比較

アマカミ(天神)	1代	2代	3代	4代	5代	6代	7代
	クニトコタチ	クニサツチ	トヨクンヌ	ウビチニ	ツノグイ	オモタル	イサナギ
タカミムスビ			1代	2代	3代	4代	5代
		ハゴクニ	東の君	二代	三代	四代	タマキネ

記述の比較

2アヤ(綾)【本文】

マサカキの　植ゑ継ぎ五百に　満る頃　世継ぎの男カミ　ウビチニの　スビチお入るる

4アヤ(綾)【本文】

五百継ぎの　マサカキも植ゑ　世々受けて　治む五代の　ミムスビの　ヰミナタマキネ　モトアケお遷す高天に　天御祖　モトモトアナレ　三十二神　祀れば民の

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

日高見では、五百継ぎ(沢山の意味)のマサカキも無事に植ゑ継がれ、これにてアマカミ(天神)の世々(多くの世)の年数を数える日読みの役職も受けられて、日高見の国を治む(治められた)五代のタカミムスビの豊受神は、ヰミナ(実名)をタマキネ(後の豊受神)と申されました。

そのタマキネは、天上のモトアケ（フトマニ図）お遷す（されて）、日高見の高天にアウワの天御祖、トホカミヱヒタメのモトモト神、アイフヘモオスシのアナレ神、フトマニの内３円のヤ、ハ、キ、チ、ヌ、ム、エ、ネ、コ、オ、ヨ、ソ、ユ、ツ、ヰ、ナの神と、外側の４円のマ、ラ、ニ、リ、ウ、ク、テ、セ、ケ、レ、ロ、ノ、ン、ル、サ、ワの神、合わせて三十二神を祀られれば、民の日高見の国神であるトヨケ神への畏敬の念より、東の君と天成る道を受けられて、後にアマカミ（天神）に就かれたワカヒト（アマテル神）の大嘗事も司られました。この時の大嘗事が慣例となり、後のキヨヒト（ニニキネ）の大嘗事にも引き継がれて行きました。

【フトマニ図】

「http://www.hotsuma.gr.jp/futomani.html」より引用させて頂きました。

4アヤ(綾)6(4 行)～9(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		マサカキノ	ムヨロニツテ	マサカキの	六万に尽きて
		ウヱツキハ	フソヒノスズノ	植え継ぎは	二十一鈴の
		トシスデニ	モフソヨロナチ	年すでに	百二十万七千
		ヰモフソニ	カンガミレトモ	五百二十に	鑑みれとも
		カンマコノ	チヰモウシアル	神孫の	千五百大人ある
		ソノナカニ	アメノミチヱテ	その中に	天の道得て
		ヒトグサノ	ナケキオヤワス	人草の	嘆きお和やす
		カミアラズ	アラネハミチモ	神あらず	あらねば道も
		ツキンカト	ナケクトヨケノ	尽きんかと	嘆くトヨケの
		ハラミヤマ	ノホリテミレト	ハラミ山	登りて見れど
		ヤシマナル		八州なる	

語句の解説

・マサカキ→2 アヤで説明済、・六万→マサカキの一代(疑問に解説あり)、

・百二十万七千五百二十→計算すると、20.12533333 穂となり 21 鈴と一致しない。このことは、最初は、1 穂からでなく、1 鈴 1 穂より始ったことを意味する。・鑑みる→先例や規範に照らし合わせる。

・千五百大人→数えきれないほどの大きな数のこと、・天の道→天神を守って行く道

・人草→一般の人々、たみくさ

原文の現在訳

マサカキの　六万に尽きて　植え継ぎは　二十一鈴の　年すでに　百二十万七千　五百二十に　鑑みれとも　神孫の　千五百大人ある　その中に　天の道得て　人草の　嘆きお和やす　神あらず　あらねば道も　尽きんかと　嘆くトヨケの　ハラミ山　登りて見れど　八州なる

【疑問】

「マサカキの　六万に尽きて　植え継ぎは」、と記述されておりますが、「マサカキの　六万に尽きて」の六万になるプロセスを教えて下さい、また、スス暦の暦法ルールがあれば、それも併せて教えて下さい。

【疑問に応える】

スス暦の暦法については、各アヤ(綾)に少しずつ記述されておりますが、全体のまとめを書いた文章が、28 アヤ(綾)5、6にも記述されております。

28アヤ(綾)5、6（抜粋）

「なれはニヱト　キアヱより　枝と穂と数え　一枝六十(穂)　十枝は六百年　百枝は六千(穂)　千枝に六万お」

解説

スス暦は、ホツマ・ヱトより成り立っており、最初のヱトの六十が一巡し、次のニヱトの最初のヱトのキアヱより枝と穂と数え、一枝は六十(穂)で位上がりし一枝となり、十枝は六十(穂)と十枝を掛け算すると六百年に。また、百枝は六十(穂)と百枝を掛け算すると、六千(穂)になります。そして、千枝に六十(穂)を掛け算しますと、六万(穂)お持って、一鈴になっております。

だが、スス暦の初めの一鈴～二十鈴の間は、ホツマツタヱに記述される以前のスス暦の御世ですので、六万(穂)で位上がりして一鈴になったことは不明ですが、二十一鈴百二十五枝三十一穂の記述があることから、六万(穂)で位上がりして一鈴になったことが云えるようです。更に、上のスス暦の暦法を簡単に述べますと、ホツマ・ヱトは、キアヱより数え始め、一巡する六十穂で位上がりし一枝となり、枝は千枝で位上がりし一鈴になるようです。

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

古代日本には、暦がなかった。このことは、国民の常識になっていた。それに対しホツマツタヱでは、ウビチニの御世～古代暦が始まっていたことが記述されていたことです。そのため、ホツマツタヱの御世には、古代日本に古代暦があったことになります。その古代暦のスス暦（吉田の命名）は、マサカキの苗であるスス苗を植えことから始まると記述されております。そして、古代暦の年数の数え方は一鈴一穂から始まり、ヱトの二巡目の二ヱトから枝を数えて、六万に尽きて、一鈴のサイクルが終わると記述されていることです。

だが、現代人の知識を振り返って見ますと、マサカキ、鈴、枝、穂、六万と云う言葉の意味ですらわからないのが現実です。そのマサカキの植え継ぎの本数は、21本目の二十一鈴の年に、すでに、スス暦の大きい暦数字に換算しますと、百二十万七千五百二十穂になり、この百二十万七千五百二十穂を鈴、枝、穂に逆算しますと、20鈴、125枝、20穂に計算されます。

だが、「二十一鈴の年に　すでに」と述べている所から、ホツマツタヱに記述される鈴、枝、穂は、20鈴に 1 鈴を加算した後の21鈴125枝20穂だったことが云えるようです。その頃、五代タカミムスヒのトヨケ（豊受神）は、次のアマカミ（天神）の世継を定めようと、アマカミ（天神）候補の人選に鑑み（先例や規範に照らし合わせる）れとも、古代から続くクニトコタチの神孫の千五百の大人もあるが、その神孫の中には天の道（天神を守って行く道）を得て、人草（一般の人々、たみくさ（民の増えるさまを草にたとえた語））の不満である「政りが悪い」と云う嘆きお和す（なごませる、やわらげる）だけの器量ある神あらず（神もいない）ようであると云われました。

そして、あらねば（もし、アマカミ（天神）を日嗣できる若人がいなければ）天の道も尽きん（尽きてしまう）かと、深く々々と嘆く日々のトヨケ（イサコの実父、後のイザナミの実父）の思いは、ハラミ山に登りて山頂より国中を眺めて見れど、心配するには及ばないと思える風景を見られたのでした。

その風景は、大らかで安泰な八州（ヤマト秋津島、淡路島、伊予・阿波二名、隠岐三つ子、筑紫、吉備の児、佐渡、大島）からなるこの国の姿でした。その国形を見られたトヨケは、人草の心を和す（なごませる、やわらげる）アマカミ（天神）の世嗣子が現れるのを心から祈られたのでした。

4アヤ(綾)9(2 行)～12(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			ヨロマスタミモ		万増す民も
		ウグメキテ	ミチナラエヌモ	蠢きて	道習えぬも
		コトワリト	ヤハリナゲキテ	理と	やはり歎きて
		ヒタカミノ	ミヤニカエレバ	日高見の	宮に帰れば
		イサナミノ	チチニモフシテ	イサナミの	父に申して
		ヨツギコモ	ガナトオホセバ	世嗣子も	がなと仰せば
		ウラナヒテ	ツキカツラキノ	占ひて	月葛城の
		イトリヤマ	ヨツギヤシロノ	イトリ山	世嗣社の
		イロシテハ	アメノミオヤニ	色垂幣は	天の御祖に
		イノラント	トヨケミツカラ	祈らんと	トヨケ自ら
		ミソキシテ	ヤチクラチキリ	禊ぎして	八千座滕
		ヌキンツル	イツチカミノリ	抜きんつる	イツチ神祈り
		トホリテゾ		徹りてぞ	

語句の解説

・万増す民も

トヨケの時代で、まだ、ワカヒト(アマテル神)が生まれる前の頃です。その当時に「万増す民も」をどのように解説するか、約一ヶ月も筆が進みませんでした。その理由は、民が万の単位で増加することは、何を指すのか不明でした。要約、万の単位で人口が増えるためには、(1)10～20年の単位の昔話をしているか、または、(2)周辺の島々より八洲に海を渡って来る以外にはないだろうと考えました。今回は、(2)項を採用しました。

・葛城(疑問_1 に解説あり)

・イトリ→丹頂鶴(吉田説について、(疑問_2 に解説あり)

辞書より引用

・蠢く→もぞもぞと動く、・習う→知識や技術を他人から教わる、・えぬ→えない、

・コトワリ(理)→わけ、理由、

・がな

願望を表す終助詞「が」に詠嘆を表す終助詞「な」が付いてできたもの。上代の「がも」に代わって，中古以降用いられるようになった語]

① 体言または体言に助詞の付いたものに付いて，願望の意を表す。…がほしいなあ。…があってくれたらなあ。「さらむ者ー。使はむとこそおぼゆれ／枕草子 300」「あぱれ，よからうかたきー。最後のいくさしてみせ奉らん／平家 9」

② 命令または禁止を表す文に付いて，第三者の動作の実現を願う意を表す。中世以降の用法。

…てほしいなあ。…てくれたらなあ。「橋へまはれば人が知る，湊の川の塩がひけー／閑吟集」「早ういねー，いねー，ともがけど，いぬる気色なく／浄瑠璃・今宮心中　中」〔上代における願望の終助詞「もがも」は，平安時代には「もがな」の形で用いられたが，「もがな」は「も　－　がな」と意識されたところから，平安時代の半ば以降，「がな」が切り離されて用いられるようになり，中世以降は「がな」がひろく用いられるに至った〕

・がも

願望を表す終助詞「が」に詠嘆を表す終助詞「も」が付いてできたもの。上代語。願望の終助詞「もがも」が「も-がも」と意識されていたと認められるところから，この語形が取り出されるが，実際には常に「もがも」の形で用いられる。下にさらに詠嘆の間投助詞「な」「や」「よ」が添えられ，「がもな」「がもや」「がもよ」となることも多い。〔中古以降は「がな」の形が用いられる〕 → もがも（終助）

・輦[訓]てぐるま→人が引く車、天子の乗る車、・色垂幣→八豊旗に見る色の幣、

・八千→はっせん。また，数がきわめて多いこと、・禊ぎ→心身を清めること、・つる→完了の助動詞、

・八千→数がきわめて多いこと、・抜きん（出る）→周囲の物よりひときわ高く突き（出ている。）、

・座→高く設けられた場所、「天の石座（いわくら）」「高御座（たかみくら）」「御手座（みてぐら）」など。

・滕（ちぎり）→2 本の経糸と 2 つの緯糸により織れた平面の総称、

原文の現在訳

万増す民も　蠢きて　道習えぬも　理と　やはり歎きて　日高見の　宮に帰れば　イサナミの　父に申して　世嗣子も　がなと仰せば　占ひて　月葛城の　イトリ山　世嗣社の　色垂幣は　天の御祖に　祈らんと　トヨケ自ら　禊ぎして　八千座滕　抜きんつる　イツチ神祈り　徹りてぞ

【疑問_1】

「月葛城の　イトリ山　世嗣社の　色垂幣は　天の御祖に　祈らんと」する文章に接して見て、この文章は、「なぜに、書かれていたのだろうか」との疑問があります。

【疑問に応える_1】

そのため、ホツマツタヱより、トヨケ（タマキネ）、葛城、八千、禊ぎ、イトリ、世継社、祈の言葉を下表のよう抜粋した所、六ヶ所の文章が記述されておりました。その結果、「トヨケが祈られた」要因には、「障（さわ）る邪禍（よこが）お　除かんと（14-34）」が置きていたようでした。そのことを推測しますと、「イサナギの世には、人口が増え世間も騒がしくなって来ようです。だが、その時には、まだ、国の中心になる世継ぎを待望されていたが、妃のイサナミに皇子が生まれておりません。

そのことで、トヨケは、占われた結果、「天の御祖に　祈らん（祈りが不足している）」との掛がでたのでした。このことは、トヨケの心配をより具体化するため、占いで、「月葛城の　イトリ山　世嗣社の　色垂幣は　天の御祖に　祈らんと」と表現したものと思われます。

トヨケ(タマキネ)、葛城、八千、禊ぎ、イトリ、世継社、祈の言葉の記述内容

4-10, 11	月 葛城の イトリ山 世嗣社の
4-11	トヨケ 自ら 禊ぎして 八千座滝り
4-40, 41	昔、 タマキネ 誓いして 葛城山の 八千禊ぎ 住みてイトリの 手車お 作りカツラの
14-34	源は トヨケ神 葛城山に 禊ぎして 障る邪禍お 除かんと 八千度祈る
16-63	妊みの帯は 葛城の 世継社に 御種祈る
28-10	故 タマギネの 葛城の 山に祈れ

【ホツマツタヱの直訳、抜粋文】

4アヤ(綾)40、41

昔、タマキネ
誓いして 葛城山の
八千禊ぎ 住みてイトリの
手車お 作りカツラの
迎ひとて ハラミに伝ふ

16アヤ(綾)63

妊みの帯は
葛城の 世継ぎ社に
御種祈る

14アヤ(綾)34

その源は
トヨケ神 葛城山に
禊ぎして 障る邪禍お
除かんと 八千度祈る

28アヤ(綾)9(3 行)～11(1 行)

名もイサナギと
イサナミの 天両神の
御子無きお 故、タマギネの
葛城の 山に祈れば
天御祖 日の輪の御魂
分け降し アマテル神お
生み給ふ

【疑問_2】

「月葛城の イトリ山」の記述がありますが、その「イトリ」の意味を教えて下さい。

【疑問に応える_2】

「イトリ」の意味について、ホツマツタヱに記述されているか否か調査して見ましたが、未記載でした。そのため言語解析の原点に帰り、「イトリ」を1音節、または2音節に別けて見ますと、(1)「①イ」+「②トリ」、または、(2)「③イト」+「④リ」の組み合わせになり、それぞれの語句を調査することにしました。

1、音節での調査

① 「イ」の一音節の意味は、「風」になります。また、他の意味をホツマツタヱより検索しますと、「ヨキイ(心)オウケテ(21-36)」や「サクライ(意)アラバ(24-60)」が該当し、「イ」の意味の一部に「心」「意」が含まれているようです。

② 「トリ」は、「鳥」や「取り」などが該当します。 (鳥の例)「黄金鵜の鳥　飛び来たり(29-52)」

③ 「イト」は多くて、「糸」、「いと(非常に)」、「暇」、「従」、「妹」など、が該当します。

④ 「リ」は、「サキリ」の「リ」が該当します。

2、文節での調査

(1)イトリは、飛ぶ鳥か

「イ」+「トリ」の組み合わせで、「イ」の意味は、上記の1、①項により風、心、意に訳しました。「トリ」の意味は、上記の1、②項で「鳥」、「取り」と訳しました。その中でも「鳥」は大空を飛ぶことができます。そのため、「イ」+「トリ」の元の「イトリ」が大空を飛ぶか、飛んだ記述がホツマツタヱに残されているか調査することにしました。まず、「イトリ」の言葉をホツマツタヱより検索しますと、8個の記述がありました。そこで、「イトリ」が「飛ぶ」として、「イトリ+飛ぶ(び)」の組み合わせの文章を検索して見ました。

その結果ですが、残念ながら、「飛ぶ(び)」の言葉に繋がる「イトリ」の文章は未記述でした。そうかと云って、「イトリ」が飛んだとの直接の記述はありませんが、間接的に「イトリ」が飛んで行ったと思える「空しき抜殻の　シライトリ　追い尋ねれば(40-25)」などの言葉は残されておりました。

このことより察しますと、「イトリ」とは、現実の鳥の一種でなく、「空想上の鳥か」、「風のように見えない鳥のことを云っているのか」と思いました。反対に、「イ」が抜けた「シラトリ」では、「つひに雲居に　飛び上がる(40-27)」ように、大空を飛ぶようです。 ご参考に、次頁にイトリの抜粋文を抜き出しましたのでご査収下さい。

(2)イトリの鳥姿は、

(1)項で、「イトリ」の言葉は、ホツマツタヱに8個の記述ありと記載しましたが、その8個の「イトリ」、または、「〇〇イトリ」の言葉を丹念に調査し、「イトリ」の容姿を探って見ることにしました。その結果、8個の内訳は、「イトリ(4個)」、「シライトリ(3個)」、「ニイトリ(1個)」でした。また、他に直接の「イトリ」の記述ではないが、「シラトリ(1個)」がありました。このことから「イトリ」の鳥姿を判断しますと、「白い鳥」で一部に「ニ(丹→赤)」がある鳥と判断されるようです。

8個の「イトリ」の記述

① 月葛城の　イトリ山(4-10、11)

② 八千禊ぎ　済みてイトリの　テクルマお(4-41、42)

③ 時に天より　ニイトリの　一羽落つれは(16-63、64)

④　なる紅葉　化けて葛城　イトリ山　羽裂き見れば(16-64)

⑤　時にオモムロ　成るイトリ　出づれば諸と(40-25)

⑥　空しき抜殻の　シライトリ　追い尋ねれば(40-26)、(シラトリも　つひに雲居に(40-27))

⑦　三度　宣り　十六月の　朗らかに　シライトリ来て　これお喰み(40-60、61)

⑧　その夜の夢に　津島森　シライトリ成る(40-77、78)

ホツマツタヱより抜粋したイトリの文章

4アヤ(綾)10(4 行)～12(2 行)【本文】

月葛城の
イトリ山　世嗣社の
色垂幣は　天の御祖に
祈らんと　トヨケ自ら
禊ぎして　八千座契り
抜きんつる　稜威力神祈り
徹りてぞ

4アヤ(綾)40(2行)～41(2 行)【本文】

昔　タマキネ
誓いして　葛城山の
八千禊ぎ　済みてイトリの
テクルマ(辞)お　作り葛城の
迎ひとて

16アヤ(綾)63(4 行)～65(4 行)【本文】

時に天より
ニイトリの　一羽落つれは
天つのり　これは息吹の
なる紅葉　化けて葛城
イトリ山　羽裂き見れば
二十四筋　数備われと
常あらず　諸鳥見れは
十五に裂け　日高見に鶴
奉る

40アヤ(綾)25(1 行)～28(4 行)【本文】

諸に勅して
神送り　時にオモムロ
成るイトリ　出づれば諸と
御陵の　御棺お見れば
冠と　サクと御衣裳
留まりて　空しき抜殻の
シライトリ　追い尋ねれば
大和国　琴弾原に
尾羽四枝　置きて河内の
古市に　また四羽落つる
そこここに　なす御陵の
シラトリも　つひに雲居に
飛び上がる　尾羽はあたかも
神の代の　世はきしぞこれ
東西もみな　治せば罷れる

40アヤ(綾)60(3 行)～61(2 行)【本文】

三度　宣り　　十六月の
朗らかに　　シライトリ来て
これお喰み　　成る白雲に
神の声

40アヤ(綾)77(4 行)～78(2 行)【本文】

その夜の夢に
津島森　　シライトリ成る
ヤマトタケ　　曰く大御神
ソサノオに　　曰く如何ぞ
国望む

3、イトリの類似語の調査

2、項の調査より「イトリ」のことを、『空想上の鳥か』、『風のように見えない鳥のことを云っているのか』と記載しましたが、更に、「イトリ」の意味を類似語より調査して見ました。類似語としては、「イトリ」の三音を組み合わせた①イリト、②リトイ、リイト、③トリイ、トイリの五個の言葉を取り上げて見ました。(ご参考)派生語の後の(　)内数字は、ホツマツタヱの記述個数を示す。

派生語図

イトリ(8個) ── ①イリト(1個)
│　　│
│　　②リトイ(2個) ── リイト(0)
③トリイ(2個) ── トイリ(0)

派生語より判断できるイトリの意味

派生語図の①イリト、②リトイ、リイト、③トリイ、トイリの中で、ホツマツタヱに記述されていた言葉は、イリト、リトイ、トリイの三語でした。その①「イリト」、②「リトイ」、③「トリイ」について、ホツマツタヱの原文に一致する文章を抜粋し、カナ語、または現在文にて、下記のように掲載しました。

その結果、各々文章中の派生語が持つ意味を観察しますと、①「イリト」は宮に入るなどの「入りと」の言葉でした。②「リトイ」は、「意味不明」のようです。また、③「トリイ」は神社などの設置してある「鳥居」と読め、このことから、「イトリ」と「イ」は、「居」となり、「月葛城の　イトリ山」の「イトリ山」の意味は「居鳥山」とでも解釈できるようです。

ホツマツタヱより抜粋した文章

① イリト (1件)

イリトは、宮に入るなどの「入りと」のことでした。

26アヤ(綾)53

モニシミテ　　ムカイノコシニ　　裳に染みて　　迎いの奥に
トヨタマノ　　アノミヤイリト　←イリト　　豊玉(姫)の　　天の宮入りと　←イリト
ヨロコビテ　　アヤニウツサセ　　喜びて　　アヤ(綾)に写させて
オルニシキ　　コアオヒノミハ　　織る錦　　小葵の御衣

② リトイ（2件）

リトイだけでは、「意味不明」のようです。

10アヤ(綾)30

ミコトノリ　　ワガチチサラバ

モロトモノ　　カエコトナセハ

マタヒトリ　　アリトイウマニ　　← リトイ

アラハルル　　タケミナカタゾ

37アヤ(綾)16

アリトイフハワレオタノマヌ　　← リトイ

ヒトニゾアリケル

カミウタオ　　キキテタタネコ

イワクコレ　　マヨフユエナリ

③ トリイ(ヰ)（2件）

トリイとは、神社などに設置してある「鳥居」の言葉でした。

21アヤ(綾)37

鳥より先に

知る神の　　島は鳥居ぞ　　← トリイ

これ神の　　皇子に教ゑて

21アヤ(綾)38

労わりお　　知らねは神は

トリヰぬぞ　　ホツマおなめて

鳥居なりける　　← トリイ

4、イトリの意味、鳥姿の考察　（吉田説）

「イトリ」の意味について、ホツマツタヱの文章より、上記のように音節、文節、類似語を調査して来ました。2項の「イトリは、飛ぶか」の調査より、「イトリ」が飛んだ記述はありませんが、間接的に飛んだ記述がありました。

また、「イトリの鳥姿は」の調査より、イトリ→(ニイトリ)→シライトリ→シラトリの言葉の変遷より、「イトリ」は、「白い鳥」で一部に「ニ(丹：赤)色」がある鳥と判断されるようです。

また、3項の「イトリの類似語」の調査では、「トリイ」の現在語が「鳥居」であることから、「イトリ」の現在訳は「居鳥」であることが判明しました。

イトリの言葉の変遷

イトリ → シライトリ → シラトリ
イトリ → ニイトリ

イトリの訳語の変遷

イトリ → 白居鳥 → 白鳥
イトリ → 丹居鳥

日本の居鳥

そこで、日本にいる鳥の中で、「白い鳥」で一部に「ニ（丹→赤）」がある鳥であり、かつ、「居鳥」の代表的な鳥を捜しますと、『日本では周年生息（留鳥）する鳥として、主に釧路湿原に生息する 頭が赤い丹頂鶴が候補に挙げられます。また、丹頂鶴は、江戸時代の歌川広重が残した「名所江戸百景」の中で江戸に飛来していた丹頂鶴を描いておりました。また、江戸近郊の三河島村（現在の荒川区荒川近辺）に丹頂鶴の飛来地があり、手厚く保護されていた。』と記載されておりました。（引用：タンチョウ_ウィキペディア） このことは、寒冷気候であった年代には、丹頂鶴が関東以西にも存在したことを想像させるようです。

また、ホツマツタヱで「イトリ」の文章が書かれた地方は特定することは難しいことですが、「イトリ」が記述された4アヤ（綾）のタマキネ（豊受神）の記述から判断しますと、日高見（宮城）、ホツマ国（小田原～茨城の範囲）が該当します。また、16アヤ（綾）の記述より、常陸（茨城）、ナカ国（山口～滋賀の範囲）が該当します。また、40アヤ（綾）のヤマトタケが活躍した古墳時代のコヱ国（三重～愛知の範囲）、伊勢が該当します。このように、「イトリ」が記述されていた地区を、江戸時代とホツマの時代を比較しますと、常陸、ホツマ国が重なり合う地区になるようです。

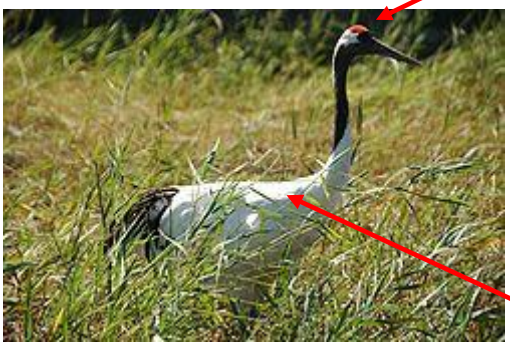
結論

従って、上記の調査結果より判断しますと、「イトリ」の意味は、日本に周年生息（留鳥）する 頭の赤い「丹頂鶴」であったことが容易に推定されるようです。（現在の丹頂鶴の写真を次頁に掲載しました。）

（注記） 写真引用：タンチョウ_ウィキペディア

丹頂鶴

頭が赤色 ← 「ホツマ：ニ （丹：赤）色」



白い羽根 ← 「ホツマ：シラ（白）色」

周年生息（留鳥）する鳥 ← 「ホツマ：居鳥 ← イトリ」

ヤマトタケの最後の夢

雲居に待つと

そして、ホツマツタヱには、ヤマトタケが三重県の能褒野で神上がりされる時に、「辞む時　東西の鹿路と　両親に　仕え満てねど　サコクシロ　神の八掌より　道受けて　生まれ楽しむ　帰途にも　誘ひ道辿る　懸橋お　登り霞の　楽しみお　雲居に待つと　人に答えん（40-19～21）」、「百度も歌ひ　ながら目お閉じ　神となる　なすことなく　営みす。（40-21）」と、記述しておりました。

そして、この時に「雲居に待つと」、歌われたヤマトタケの思いは、イトリ（丹頂鶴）の背に乗り 雲居に神上がりされることが夢であったようで、その思いが、下記の「シラトリの雲居に飛び上がる」ことで達成されたようです。

雲居に飛び上がる

40アヤ（綾）27（3 行）～28（1 行）【本文】

なす御陵の

シラトリも　　つひに雲居に

飛び上がる

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

その頃になると、周辺の島々より海を渡って八洲を目指す人たちが多くなり、その数は万増すように民も増えて行きました。その甲斐があって、稲作や田んぼなどの農作業も盛んなり、また、近隣の集落の人の往来、交流、連携、経済活動も活発になって行きました。だが、反面、民が増えて来るに連れ、不穏な蠢（ウグメ→もぞもぞと動く）きをする輩が出て来ておりました。そのため、その輩どもは、国常立よりつづくアマカミ（天神）の御世を治める天の道を習（人より教わり）えぬ（得ない）人も出て来て、また、一部には従わないものが出て来ました。その従わない道理（わけ、理由）をと思いで、その人々に聞いて見た所、その道理は理屈に合わないことばかりであり、トヨケはやはりと歎き（悲嘆）て、この国の将来に一抹の不安感を憶えられました。

そのトヨケは、日高見のお住まいの「東の君」の宮に帰って見れば、トヨケが予感されたように、世継ぎの不安が広がっておりました。トヨケが日高見の宮に帰られると、実娘であるイサコ姫のイサナミの声がするではありませんか。イサナミの声に気付かれたトヨケは、後ろを振り向かれました。そして、イサコ姫が父（トヨケ）に申しておられるには、「イサナギのアマカミ（天神）に嫁いで日が経っておりますが、一日でも早く、アマカミ（天神）の「世嗣（天子の跡継ぎ）子も欲しいと思っておりますがな」と仰せになれば、トヨケは、わが娘のイサナミの願いを聞き入れ、世嗣皇子のことを占ひて（占われました）。

その占いの結果は、「月葛城の　イトリ山　世嗣社の　色垂幣は　天の御祖に　祈らんと」であったのです。占い結果を読まれるやトヨケは、我が身より血の気が引く思いに駆られ、「天の道」に危機感を覚

えられました。その悪い思いは、日頃より、アマカミ(天神)をお祭りしていたが、「どこかに、奢りがあった」と察せられ、自責の念に囚われられたのでした。そのため、日頃の奢りを深く反省されたトヨケは、自ら月葛城山に禊ぎ(心身を清めること)して、障る邪禍お除かんと(14-34)世嗣社に八千度祈り(14-34)、供物を置く座を作り、滕(読み:ちぎり)の織物を敷き、周囲の物よりひときわ高く抜きんつる(出る)して、イツチ神(居土地神、その土地の氏神)の祈りに徹りてぞ(徹せられました。)

ホツマツタヱ本文

4アヤ(綾)12(3 行)～13(2 行)【本文】

ヲシテ	カナ文字		現在訳
		アメノミオヤノ	天の御祖の
	マナコヨリ	モルルヒツキト	眼より もるる日月と
	アモトカミ	ミソフノカミノ	天基神 三十二の神の
	マモルユエ	コタネナルコト	守る故 子種成ること
	オボエマス		覚えます

原文の現在訳

天の御祖の 眼より もるる日月と 天基神 三十二の神の 守る故 子種成ること 覚えます

【疑問_1】

下記の二つの文章は、4アヤ(綾)の前回に解説した文章と今回解説を試みる文章です。この二つは、ホツマツタヱ文献では、それぞれが継続文章です。それなのに、4アヤ(綾)12(2 行)と12(3 行)間では、大きく違う展開の物語になっているようです。この違う展開になった経緯や詳細を紐解くヒントは、何かあるでしょうか。

4アヤ(綾)10(1 行)～12(2 行)【前文】

イサナミの 父に申して
世嗣子も がなと仰せば
占ひて 月葛城の
イトリ山 世嗣社の
色垂幣は 天の御祖に
祈らんと トヨケ自ら
禊ぎして 八千座滕
抜きんつる イツチ神祈り
徹りてぞ

4アヤ(綾)12(3 行)～13(2 行)【後文】

天の御祖の
眼より もるる日月と
天基神 三十二の神の
守る故 子種成ること

【疑問に応える_1】

トヨケと天の御祖の関係

　先ず、「天の御祖」に関する文章について二つの文章の本質を調べるため、全ホツマツタヱを検索して見ました。すると、14アヤ(綾)文の両文章を網羅するように、28アヤ(綾)9～10に詳細が見つかりました。その文章を記述しますと、

　「名もイサナギと　イサナミの　天二神の　御子無きお　故、タマギネの　葛城の　山に祈れば　天御祖日の輪に御魂　分け降し　アマテル神お　生み給ふ」、になります。

　28アヤ(綾)9～10の完訳文は省略しますが、要点は、トヨケ(タマギネ、豊受け神)の願いを天御祖が聞き入れられたとのことです。4アヤ(綾)10(1 行)～13(2 行)文章では、「アマテル神の生まれ」までは記述されませんが、人が生まれる過程を説明する「ホツマの宇宙論(吉田説)」が記述され、すでに確立している文章を目にしました。

【疑問_2】

　4アヤ(綾)12(3 行)～13(2 行)【本文】の「天の御祖の　眼より　もるる日月と　天基神(元々神と天並神の2神を云う。)　三十二の神の　守る故　子種成ること」とは、何を意味するのか教えて下さい。

【疑問に応える_2】

　この文章は「ホツマの宇宙論(吉田説)」を説明するように、14アヤ(綾)16～18では、「人の誕生論」が記述され、その中に、「種、天並神、日月、眼」が記述されておりました。

その文章を記述しますと、

　「人生まる時　元つ神　そのたえもりが　種降し　物と魂　結ひ和す　天並神、臓、腑、血脈、音声、形輪、眉、目、髪　わが神は　日月の太霊お　降す故　世継ぎ生まんと　思う時　眼のアカ(垢)そそぎ　朝日祈り　眼より月日の太霊お得て」、になります。

　14アヤ(綾)16～18の完訳文は省略しますが、要点は、人成る時に「元つ神(元々神)」が種降し体と魂を結び付け、「天並神」が体の各機能を働かせ、「天の御祖」は自らの眼より月日の太霊(生気)を授けられると云う。

　　また、「三十二の神」は、17アヤ(綾)22～23に記述しておりますが、「眉目形　十六万八千の　ものをして　人の魂　喜ばす」とされております。

　このように、14アヤ(綾)の「世継ぎ告る祝詞の文」を読んで行きますと、「トヨケ神、アマテル神などの当時の宇宙観」を記述していると推定されるようです。

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

（前文の記述：天の御祖にトヨケ自ら禊ぎされてイツチ神に祈られました。）そのトヨケの祈りが通じたのか。わが神の天の御祖は日月の太霊（生気）お降される時、日の輪の世継ぎ生まんとされるイサナギを思われました。そして、眼のアカ（垢）をそそぎ、朝日に祈られ、眼よりもるる（漏れる）月日の太霊（生気）を授けられると、天基神の内の一人の元つ神（元々神）は、種降し体と魂を結び付けられました。天基神のもう一つの神である天並神は体の各機能を働かせられました。また、三十二の神は、「眉目形　十六万八千の　ものをして　人の魂　喜ばす」とされ、人成るを守る故に子の種が成る（成熟した）ことを覚えられております。

4アヤ（綾）13（3 行）～17（1 行）【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			コノコロギミハ		この頃ギミは
		ハラミヤマ	ノホリテイワク	ハラミ山	登りて曰く
		モロトモニ	クニクニメクリ	諸共に	国々巡り
		タミオタシ	ヒメミコウメト	民お治し	姫御子生めど
		ツギコナク	タノシナキトテ	嗣子なく	楽しなきとて
		イケミツニ	タノメオアラヒ	池水に	左の目お洗ひ
		ヒルニノリ	カノメオアラヒ	日霊に祈り	右の目お洗ひ
		ツキニ ノリ	イシコリドメガ	月に祈り	イシコリドメが
		マスカガミ	ヰツクリススム	真澄鏡	鋳造り進む
		イサナギハ	アメオシラスル	イサナギは	天お治する
		ウツノコオ	ウマンオモヒノ	うつの子お	生まん思ひの
		マスカガミ	マテニヒルツキ	真澄鏡	左右に日月
		ナツラエテ	カミナ リイデン	なづらえて	神成り出でん
		コトオコヒ	クビメグルマニ	ことお請ひ	首巡る間に
		アグリコフ	カクヒオツミテ	天茲請ふ	かく日お積て
		ミタマイル		御魂入る	

語句の解説

・ギミ（君）→イサナギ、イサナミ、・とて→といって、・アグリ→天茲、天恵、天理

・池水（疑問に解説あり）、・真澄鏡（疑問に解説あり）

・鋳造り進む→BC3～4世紀、シナより鋳物が伝来し、鋳物作りが始まった、

・うつの子→「う」は大きいと訳することより、尊い子（指導者）となる。

辞書より引用

・この-ごろ【×此の頃】

《上代では「このころ」》 ←ホツマツタヱの記述は、「コノコロギミハ」でありと記述している。

1 少し前の時から現在にかけての期間。ちかごろ。最近。他の解説は省略しました。

デジタル大辞泉の解説

・なずらう【準ふ・准ふ・擬ふ】

一準ずる。匹敵する。他の解説は省略しました。大辞林 第三版の解説

原文の現在訳

この頃ギミは ハラミ山 登りて曰く 諸共に 国々巡り 民お治し 姫御子生めど 嗣子なく 楽しなきとて 池水に 左の目お洗ひ 日霊に祈り 右の目お洗ひ 月に祈り イシコリドメが 真澄鏡 鋳造り進む イサナギは 天お治する うつの子お 生まん思ひの 真澄鏡 左右に日月 なづらえて 神成り出でん ことお請ひ 首巡る間に 天茲請ふ かく日お積て 御魂入る

【疑問】

イサナギ、イサナミは、日嗣御子を生むために、ハラミ山(富士山)の山頂のコノシロ池の水で「左右の眼を洗われた」とする解説が一般的のようですが、正しい解説でしょうか。また、二神は、イシコリドメに「マスカガミ(真澄鏡)を造らせた」と記述されているが、年代的にはいつ頃、何個、大きさはどの位だったでしょうか。また、マスカガミ(真澄鏡)はどのような配置で使用されていたのでしょうか。

【疑問に応える】

(1)コノシロ池の水で「左右の眼を洗われた」

イサナギ、イサナミが、ハラミ山の山頂のコノシロ池で眼を洗われたとする解説は、ロマンチックでいいですね。現在のコノシロ池は、「浅間神社の奥宮の近くにあると記述されている」ようで、また、コノシロ池の水は湧水のようです。私も現在のコノシロ池の姿見るのは初めてですが、WebのHPより引用して観察して見ました。(詳細は、下の写真を参照方。) その結果、写真より判定されるコノシロ池の大きさは、(1)池の周りの地面の高さ、(2)手前の砂に重機のキャタピラの跡形、(3)池の先に写っている人間の大きさより判断しますと、「差ほど大きくない、大きな溜まり池であり、水深も浅い池」のよう感じられるようです。

(2)マスカガミ(真澄鏡)が造られた年代、個数、大きさ、および、祭祀の鏡の配置

マスカガミ(真澄鏡)が造られた年代は、アマテル神が生まれる前になり、ホツマツタヱに記述されるスス暦の記述は、4アヤ(綾)7に、「二十一の鈴の 年すでに百二十万七千 五百二十に」の記述があります。この年代を西暦に換算しますと、紀元前4世紀 (紀元前330年～331年)になります。

マスカガミ(真澄鏡)が造られた個数は、最低2個と推定されるようです。そのことは、本文に「真澄鏡

左右に日月　なづらえて」と記述しており、日と月の2個になづらえて（意味は、準ずる、匹敵する、見立てる）より推定できるようです。

　マスカガミ（真澄鏡）が造られた大きさは不明ですが、後に、アマテル神が作らせた「八咫（タ）鏡」の大きさを示す記述が、17アヤ（綾）5～6にあります。その記述は、「現在の数学」との接点と思われる記述であり、「天の巡りの　曲尺　これで人身を　抱かんと　丸めて　ワタリ（径）　フタタ（二咫）足る」と記述されておりました。そのため、2003年（平成15年）11月頃に、「八咫（タ）鏡の直径」を計算したことがあります。その時の結論になる「八咫（タ）鏡の直径」は、古代人の身長を150～1800cm と仮定しますと、「38．4～46．18cm」と計算しており、大きい鏡になっておりました。

　マスカガミ（真澄鏡）は、「左右に」と本文に記述していることより、マスカガミ（真澄鏡）をイサナギ、イザナミの左右に配置していたことがわかります。また、「神成り出でん　ことお請ひ」との記述がありますが、この文章からは、ハラミ山の山頂にマスカガミ（真澄鏡）を運び込んで、神に請われたか否かは推測できないようです。

引用 HP

　アドレス　http://www.osumi.or.jp/sakata/fuzisan/ohatimeguri.html

コノシロ池　2013 年 7 月 8 日　　富士山登山記録より引用させて頂きました。

（吉田の感想）

　コノシロ池の大きさを、池の先に写っている人間、手前の砂に重機のキャタピラの跡形と比較しますと、「差ほど大きくない、溜まり池」のようですね。

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

この頃、イサナギ、イサナミの二神の君は、ハラミ山（現在の富士山）に登り（られ）て曰く（申されることには）、 諸神と共に国々を巡り、民お治して来ました。その間に筑波では、ヒル子姫の御子を生めど残念ながら、天日嗣となる男の子の嗣子が生まれなく、二神の君は、待望の天日嗣の皇子を育てられる楽しみもなき日々を送られておりました。

そうかとて（といって）、天日嗣の皇子の誕生を諦めるわけには行きません。その日からイサナミの神は、禊を始められたのでした。禊の順序は、天御祖神より伝わる秘伝の「禊の文」に従われました。その「禊の文」には、「日月の太霊お　降す故　世継ぎ生まんと　思う時には、眼のアカ（垢）そそぎ　朝日祈り　眼より月日の太霊お得て」と記述されておりました。

そのため、イサナミの神は、「眼より月日の太霊を得る」ため、まず、池の水に左手を入れ、水を掬い左の目お洗ひ、その後に日霊に祈りを捧げられました。次に、右手で水を掬い右の目お洗ひ、その後に月に祈りを捧げられたのでした。

イサナギのアマカミ（天神）より真澄鏡の製作を依頼されておりましたイシコリドメ（鋳物師）が、真澄鏡の鋳造りに着手されて、造形が進むことになりました。その真澄鏡の大きさは、現在では推し測ることはできませんが、後に、アマテル神が造らせた「八咫（タ）鏡の直径」は、古代人の身長を150～1800cm と仮定しますと、「38．4～46．18cm」と計算されておりました。このことより、イシコリドメ（鋳物師）が造った鏡も、大きい鏡であったろうと推定されます。

イサナギは、万増すように、日増しの民の増加に対応できる天成る道を確立せんがため、天（下）お治することが容易にできるうつの子（大人物の天日嗣皇子）お生まんとの思ひの心にかられました。そして、イシコリドメに造らせていた真澄鏡ができたとの連絡を受けて、自ら（二神）の左右に一個ずつ置くように勅りされました。祭祀に用いたその二つの真澄鏡は、恰も日と月になづら（なずらう→準ずる。匹敵する。見立てる。）えられて置かれるために造られたもので、日月の太霊お多く受け止めることができました。

そして、うつの子を待望されたイサナギの朝日の祈りは、日の神の太霊に成りて相出でんことお、請ひ願われたのでした。その甲斐があって日の神の太霊は、イサナミの首巡る間にアグリ （天茲、天恵、天理）を請ふ（請われました）。 そして、いつしか、二神の願いは、かく日（一日一日）お積み重ねられて、日の神の御魂は、太霊となってイサナミの体内に受け入れられるのでした。

4アヤ(綾)17(1 行)～17(4 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			カドハチリケノ		才は身柱の
		アヤトコロ	オコナヒチカニ	奇所	行ひ千日に
		ナルコロハ	シラハギソメテ	なる頃は	白脛染めて
		サクライロ		桜色	

語句の解説

・かど(才)→見どころ。風趣。・あや(奇)→不思議なまでに、・脛(ハギ、スネ)→すね、

・身柱→襟首の下、両肩中央部(疑問_1 に解説あり)

・桜色→月の汚穢(月経)が染めた色(疑問_2 に解説あり)

原文の現在訳

才は身柱の　奇所　行ひ千日に　なる頃は　白脛染めて　サ桜色

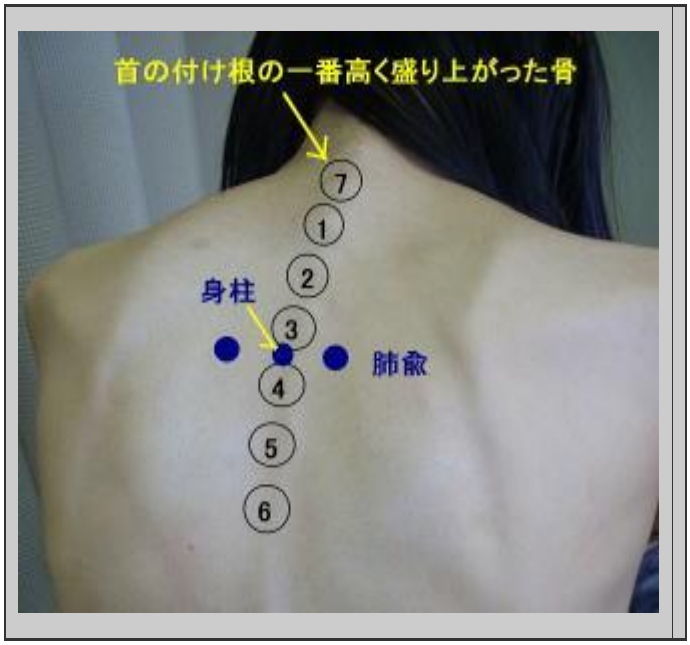
【疑問_1】

身柱の場所を教えて下さい。

【疑問に応える_1】

辞書で身柱の解説を調べますと、「襟首の下、両肩の中央部」となっています。場所は、Ｗｅｂの「よく使うツボの取り方」ＨＰの写真を下記のように引用しましたのでご覧下さい。

引用ＨＰアドレス：http://wwwe.pikara.ne.jp/baian/tubo.ht



身柱：襟首の下、両肩の中央部

【疑問_2】

「白脛染めて」とは、どん意味になるでしょうか。

【疑問に応える_2】

私も「白脛染めて」の意味がわからなかったため、白脛をＷｅｂで検索して見ました。すると、「久米仙人_ウィキペディア」に、名解答がありました。驚くことに、ホツマの当時も奈良時代の天平年間も、若い女性の白い脛(はぎ、スネ)の魅力には脱帽したようですね。

久米仙人_ウィキペディア（引用）

久米仙人(くめ の せんにん)は、久米寺(奈良県橿原市)の開祖という伝説上の人物。・・・中略・・天平年間に大和国吉野郡竜門寺の堀に住まって、飛行の術をおこなっていたが、久米川[要曖昧さ回避]の辺で洗濯する若い女性の白い脛(はぎ)に見惚れて、神通力を失い、墜落し、その女性を妻とした。・・・後略・・。

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

その御魂が入る才（かど：見どころ）は身柱（襟首の下、両肩の中央部）と云うところの奇(あや:不思議なまで)の所(ようす)になります。そして、うつの子を待望されたイサナギ、イサナミの朝日の祈りの行ひが千日になる頃には、イサナミの男神の心を惑わす白脛（白いスネ）が、月の汚穢(月経)に染められて、桜色になっておりました。そして健康な身体を維持されておりました。

4アヤ(綾)17(4 行)～24(3 行)【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
	アルヒオカミガ	ある日男神が
オヱトエバ	ヒメノコタエハ	汚穢問えは　姫の答えは
ツキノオエ	ナガレトトマリ	月のオエ　流れ留まり
ミカノノチ	ミモキヨケレハ	三日の後　身も清けれは
ヒマチスト	オカミモヱミテ	日待ちすと　男神も笑みて
モロトモニ	オガムヒノワノ	諸共に　拝む日の輪の
トビクタリ	フタカミノマエ	飛び降り　両神の前
オチトトム	オモワスイダク	落ち留む　思わす抱く
ユメココチ	サメテウツホヒ	夢心地　覚めて潤ひ
ココロヨク	ヤニカエレハ	心よく　宮に帰れは
ヤマスミガ	ササミキススム	ヤマスミが　笹酒すすむ
カレオカミ	トコミキシルヤ	故、男神　床酒知るや

		メノコタエ	コトサカノオガ	女の答え	コトサカノオが
		ミチキケハ	トコミキハマツ	道聞けは	床神酒は先つ
		メガノミテ	ノチオニススム	女が飲みて	のち男に進む
		トコイリノ	メハコトアゲズ	床入れの	女は言挙げず
		オノヨソヰ	メガシリトツク	男の装ゐ	女が知り嫁ぐ
		シタツユオ	スエバタガヒニ	下露お	吸えばお互いに
		ウチトケテ	タマシマカワノ	打ち解けて	タマシマ川の
		ウチミヤニ	ヤトルコタネノ	内宮に	宿る子種の
		トツキノリ	コオトトノフル	嫁ぎ法	子お整ふる
		トコミキハ	クニウムミチノ	床神酒は	国生む道の
		オシヱゾト	カクマシワリテ	教えぞと	かく交わりて
		ハラメトモ	トツキニウマズ	妊めとも	十月に生まず
		トシツキオ	フレトモヤハリ	年月お	ふれともやはり
		ヤメルカト	ココロイタメテ	病めるかと	心痛めて
		コソムツキ	ヤヤソナワリテ	九十六月	やや備わりて
		アレマセル	アマテルカミゾ	生れませる	アマテル神ぞ

語句の解説

・月のオエ→月経の汚穢、・笑→(訓)えむ、・ヤマスミ→六代目、谷の桜内、

・故→それゆえ。だから。そこで、・コトサカノオ(疑問_1 に解説あり)、

・タマシマ→陰門の古名〔和名抄〕、・国生む道→人が国を作る教え、

・九十六月(疑問_2 に解説あり)、

辞書より引用

・しま(接尾)

①名詞その他，状態を表す語に付いて，そのような様子であることを表す。さま。「思はぬに横ー風のにふふかに覆ひ来ぬれば／万葉集 904」

②日時を表す語に付いて，早々の意を表す。「元日ーから小言だ／滑稽本・浮世風呂 3」

大辞林 第三版の解説

・かれ【故】

〔指示代名詞「か」に動詞「あり」の已然形「あれ」が付いた「かあれ」の転〕

①それゆえ。だから。そこで。② すなわち。ここに。そこで。段・・(後略)・。大辞林 第三版の解説

原文の現在訳

ある日男神が　汚穢問えは　姫の答えは　月のオエ　流れ留まり　三日の後　身も清けれは　日待ちすと　男神も笑みて　諸共に　拝む日の輪の　飛び降り　両神の前　落ち留む　思わす抱く　夢心地　覚めて潤ひ　心よく　宮に帰れは　ヤマスミが　笹酒すすむ　故、男神　床酒知るや　女の答え　コトサカノオが　道聞けは　床神酒は先つ　女が飲みて　のち男に進む　床入れの　女は言挙げず　男の装ゐ女が知り嫁ぐ　下露お　吸えばお互いに　打ち解けて　タマシマ川の　内宮に　宿る子種の　嫁ぎ法　お整ふる　床神酒は　国生む道の　教えぞと　かく交わりて　妊めとも　十月に生まず　年月お　ふれとも　やはり　病めるかと　心痛めて　九十六月　やや備わりて　生れませる　アマテル神ぞ

【疑問_1】

ここの文章は、イサナギ、イサナミに六代目のオオヤマスミが、イサナギに「笹酒をすすめ」ながら、そこで、イサナギは「床酒知るや」と尋ねている件です。

それに対し答えたのは、「女（イサナミ）の答え」であり、イサナミが「床酒」の理由を知るべきところを、どう云う理由か、ホツマツタヱの記述は、「コトサカノオが　道聞けは」 となっている。ここの人間関係と想定される問答を再現して欲しい。

ヤマスミが　　笹酒すすむ
故、男神　　床酒知るや。
女の答え　　コトサカノオが
道聞けは　　床神酒は先つ
女が飲みて　　のち男に進む

【疑問に応える_1】

本文の解説に述べましたが、ここの人間関係は、（1）イサナギ、イサナミのアマカミ（天神）と、（2）現在で云えば、侍従職のオオヤマスミ、（3）部下のコトサカノオの四人がいると想定されます。

そこで、オオヤマスミが、床酒の大切さをイサナギ、イサナミに、知っているかと尋ねられますが、新婚の両神は答えにくかったと思われます。そこで、両神に変わり、コトサカノオがオオヤマスミに「床酒の道」、「イモオセ（夫婦）の道」を尋ねたと思われる文章が記述されているようです。

該当部本文の解説

イサナギ、イザナミのアマカミ（天神）が筑波の宮に帰れは、夜半の頃です。六代目の谷のサクラウチのオオヤマスミが、笹酒を持って来て、イサナギに笹酒をすすむ（奨められました。）

故（そこで）、オオヤマスミは男神（イサナギ）に、床酒知るやと問いかけました。すると、利発に振舞われた女（イサナミ）の答えも、「教えて下さい」とのことでした。そこで、傍に控えていたコトサカノオが、うおや（大親）翁のオオヤマスミに、是非、「イサナギ、イサナミのアマキミ（天君）にイモオセ（夫婦）の道を教えてあげて下さいと申し上げられました。そして、三人は、オオヤマスミよりイモオセ（夫婦）の道を聞けは（お聞きになられたのでした。）

【疑問_2】

本文の「かく交わりて　妊めとも　十月に生まず　年月お　ふれともやはり　病めるかと　心痛めて」の文章の性交、妊娠、十月に生まずのプロセスは、通常でも診られる出産状況と思われます。だが、次の「九十六月　やや備わりて　生れませる」の文章は、出産期間と大きく相違しているようです。何か、特別の理由があるでしょうか。

【疑問に応える_2】

「九十六月　やや備わりて　生れませる」の文章をそのまま直訳しますと、「8年後に生れた」となります。そこで、もう一度、九十六月について考察して見ますと、九十六月の「十六」は他にも使用されており、「タチカラオ　三十六月ます」、「サルタヒコ　十六年居れど」の「十六」になります。このように考察して来ますと、九十六月も8年以外に他の意味がありそうです。

そこで途中経過は、省略しますが、九十六月には、九ヶ月十六日が隠れておりました。そこで、九ヶ月十六日を通常の暦の月日に換算しますと、「十月十六日」になります。そうしますと、「妊めとも　十月に生まず」の記述は「十月一日に生まず」に、「十月十六日に生んだ」と考察ができるようです。

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

ある日、男神（イサナギ）がイサコ姫に月の汚穢の周期を問えは（問われれば）、イサコ姫（結婚前のイサコ、後のイサナミ）のお答えは、月（月経）のオエ（汚穢、月経物）は、今日流れ留まりました。そのことをお聞きになられた男神は、オエが留まった今日より「三日の後に　身も清けれは（清けるようでしたら）　次の日は待ちす（待っております）」と男神のイサナギも笑みてお言葉を返されました。

その日のイサナギは、諸共に天御祖が分け降される日の輪の御魂に拝む（拝まれました。）その甲斐があって、天御祖の日の輪の太霊（生気）は飛び降りて、両神の前に落ちるや世継ぎの太霊（生気）を両神は留む（留められました。）　そして、二人は、思わす日嗣皇子を抱く夢心地を一瞬、体感されたのでした。だが、その幻の体感も夢心地より覚めても心の潤ひは長続きし、また心地好く日嗣皇子を待望されたのでした。

イサナギ、イザナミのアマカミ（天神）が筑波の宮に帰れは、夜半の頃です。六代目の谷のサクラウチのオオヤマスミが、笹酒を持って来て、イサナギに笹酒をすすむ（奨められました。）

故（そこで）、オオヤマスミは男神（イサナギ）に、床酒知るやと問いかけました。すると、利発に振舞われた女（イサナミ）の答えも、「教えて下さい」とのことでした。そこで、傍に控えていたコトサカノオが、うおや（大親）翁のオオヤマスミに、是非、「イサナギ、イサナミのアマキミ（天君）にイモオセ（夫婦）の道を教えてあげて下さいと申し上げられました。そして、三人は、オオヤマスミよりイモオセ（夫婦）の道を聞けは（お聞きになられたのでした。）

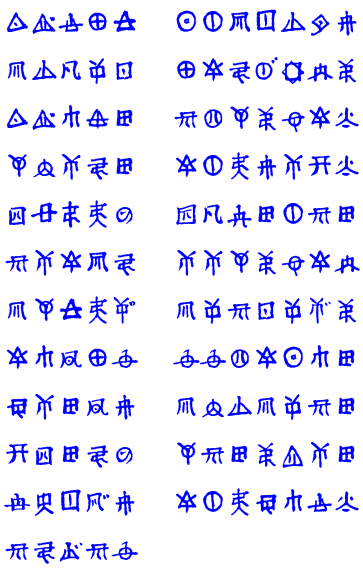
そして、オオヤマスミは、話を続けられ、「床神酒は先つ女が飲みて、のち男に神酒を進む（進めます）。　次に床入れの際は、女は言挙げず（言葉に出して言い立てることは止めましょう）　そして、男の

装ゐ(よそおい)のままを女が知りて嫁ぐことが良いでしょう。また、下露お吸えばお互いに打ち解けて二人の心は更に高まり、相引き合うようにタマシマ(玉門:陰門の古名〔和名抄〕川の内宮(子宮)に子種が宿ることでしょう。これこそが、古代より伝わる子種の嫁ぎ法であり、子お整ふることができ、そのため、古くから伝わる子種の嫁ぎ法の真髄である床神酒は　国生む道の　教えぞと、言い伝えられて来ました。

　そして、イサナギとイサナミの二神は、かく交わりされてイサナミが妊められとも、産み月の十月(10 月 10 日の医学上の妊む期間)に生まず、その前に産み月が来たと、イサナギは年月おふれ(触れ、ふれる→広く知らせる。)回られるとも、やはり、前駆陣痛は来ているが本陣痛の兆候がなく、身籠られたイサナミを心配されながら未だ病めるかと　心痛めて九十六月(10 月 16 日)に、　やや備わり(備わる→その人の人格の一部として能力・気品などがある。)て　あ(生)れませる　アマテル神ぞ

4アヤ(綾)24(4 行)～32(3 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		フソヒスズ	モモフソヰヱタ	二十一鈴	百二十五枝
		トシキシヱ	ハツヒホノホノ	年キシヱ	初日ほのぼの
		イツルトキ	トモニアレマス	いつる時	ともに生れます
		ミカタチノ	マトカノタマゴ	御形の	円の玉子
		イブカシヤ	ウオヤオキナノ	訝しいや	大祖翁の
		ヤマズミガ	コトホギウタフ	ヤマズミが	言祝ぎ歌ふ
		ムヘナルヤ	ユキノヨロシモ	宜なるや	幸のよろしも
		ミヨツキモ	ヨヨノサイワイ	御世嗣も	代々の幸い
		ヒラケリト	オホヨスガラニ	開けりと	大夜すがらに
		コトブクモ	ミタビニオヨフ	寿くも	三度に及ふ
		ユキヨロシ	ヒトノトワシノ	幸よろし	人の問わしの
		コタヱニモ	トヨケノカミノ	答ゑにも	トヨケの神の
		ヲシヱアリ	サワルイソラノ	教ゑあり	障るイソラの
		ミソギニテ	ヱナノカコミハ	禊ぎにて	胞衣の囲みは
		オノコロノ	タマコトナラハ	オノコロの	玉子とならは
		ユキヨロシ	タマノイワトオ	幸よろし	玉の岩戸お
		ヒラケトテ	イチヰノハナノ	開けとて	一位の花の
		サクモチテ	イマコソヒラク	笏持ちて	今こそ開く
		アマノトヤ	イツルワカヒノ	天の戸や	出づる若日の
		カカヤキテ	シラヤマヒメハ	輝きて	白山姫は



ウブユナス　アカヒコクワニ　産湯なす　アカヒコ桑に
ヒクイトオ　ナツメガオリテ　引く糸お　ナツメが織りて
ウブキヌノ　ミハタテマツル　産着の　御衣奉る
タラチメノ　ツカレニチシル　垂乳女の　疲れに乳知る
ホソケレハ　ホイヰノカミノ　細けれは　ホイヰの神の
ミチツヒメ　チチタテマツリ　ミチツ姫　乳奉り
ヒタスレド　ヒトミオトヂテ　養すれど　瞳お閉じて
ツキヒナヤ　ヤヤハツアキノ　月日なや　やや初秋の
モチノヒニ　ヒラクヒトミノ　望の日に　開く瞳の
シホノメハ　タミノテフチノ　しほの目は　民の手拍との
ヨロコビニ　ツカレモキユル　喜びに　疲れも消ゆる
ミメグミヤ　御恵みや

語句の解説

・二十一鈴百二十五枝→スス暦、・キシヱ→ホツマ・ヱトの NO.31、・仄仄→ほのかに明るいさま
・いつる→出流、・形→物の姿・格好、・まとか→まるいさまの、・訝しい→疑わしい
・ヤマズミ→六代、谷の桜内、・言祝ぎ→言葉で祝うこと、・宜なる→もっともなこと
・ゆき→名のりにゆき(幸)あり、・宜しき→ちょうどよいこと、
・御世嗣→跡目を相続すること、(ワカヒトヘ世嗣)、・代々→何代も続いているさま、
・幸い→しあわせ、・開け→始まり、・けり→物事の終わり。結末。決着、・オホヨ→大夜。
・よもすがら【終夜】→一晩中。夜どおし。よすがら、・寿→めでたいこと、・トワシ→問わし
・問う→知りたいことを尋ねる、・障る→さまたげとなる、じゃま、差し障る→さしさわりが生じる
・イソラ→意がない空々しいこと。空虚な意。(吉田説)、・禊→身の罪や穢を洗い清める
・オノコロ→天御祖神の心、・ゆき→名のりにゆき(幸)あり、・よろし→まあまあよい程度をいう
・玉の岩戸→岩戸の美称、・とて→と云って、
・一位→イチイ科の常緑高木で笏を作った。昔，この木から笏を作ったことから位階の一位にちなむ
　という。
・サク→笏(しゃく)→束帯着用の際、右手に持つ細長い板、・天の戸→「天の岩戸」に同じ。
・白山姫→ワカヒトの叔母、・産湯→生まれたばかりの赤ん坊を初めて入浴させること
・アカヒコ→名前の「赤彦」？、・ナツメ→保母、・産着→生まれた赤ん坊に初めて着せる着物
・御衣→お召し物、・垂乳女→生みの母、・養す→養い育てる、
・瞳→眼球の中心にある黒く丸い部分ね、・しほの目→眼を細めてる
・えな【胞衣】→胎児が生み出されたのち，排出された胎盤・卵膜など。後産あとざん。ほうい。胎衣。
・事(こと)よろ・し→《「よろし」は、まあまあよい程度をいう》、1　大したことはない。差し支えがない。
・とて→①　文または文に相当する語句に付いて，「といって」「と思って」の意を表す。

原文の現在訳

二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ　初日ほのぼの　いつる時　ともに生れます　御形の　円の玉子　訝しいや　大祖翁の　ヤマズミが　言祝ぎ歌ふ　宜なるや　幸のよろしも　御世嗣も　代々の幸い　開けりと　大夜すがらに　寿くも　三度に及ふ　幸よろし　人の問わしの　答ゑにも　トヨケの神の　教ゑあり　障るイソラの　禊ぎにて　胞衣の囲みは　オノコロの　玉子とならは　幸よろし　玉の岩戸お　開けとて　一位の花の　笏持ちて　今こそ開く　天の戸や　出づる若日の　輝きて　白山姫は　産湯なす　アカヒコ桑に　引く糸お　ナツメが織りて　産着の　御衣奉る　垂乳女の　疲れに乳知る　細けれは　ホイヰの神の　ミチツ姫　乳奉り　養すれど　瞳お閉じて　月日なや　やや初秋の　望の日に　開く瞳の　しほの目は　民の手拍との　喜びに　疲れも消ゆる　御恵みや

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

アマテル神が生まれられたのは、二十一鈴百二十五枝年キシヱになります。このアマテル神が生まれたスス暦の二十一鈴百二十五枝年キシヱを大きい暦数字に変換し、一日の穂と約一年三百六十五日で太陽暦に換算し、更に、西暦 399 年を2倍化暦の終点として西暦に換算しますと、アマテル神の生まれ年は、紀元前330年（吉田説）になるようです。この日は、今で云うところの元日であり、初日がほのぼの（仄仄：ほのかに明るいさま）と、いつる（出流）時と共に、アマテル神（幼名：ウヒルギ、イミ名：ワカヒト）があ（生）れます。とホツマツタヱは記述しておりました。

そして、そのアマテル神が生まれられた御形（物の姿・格好）の姿の尊いこと。その姿は円（まるいさま）の玉にも匹敵すようでした。だが、皆はそのお姿が他と違うため、訝しい（疑わしい）やと声を発しましたが、その声にも増して、円の玉の姿に包まれたアマテル神の尊い姿に見入られた、大祖翁のオオヤマズミ（六代目、谷のサクラウチ）は、感動されて、そして、オオヤマスミの大祖翁が率先されてアマテル神の誕生を、大声を発し祝われるや、皆に言祝ぎ（言葉で祝うこと）され、天成る道の歌を歌（ふ）われるのでした。

天成る道の歌

宜なるや　ゆきのよろしも　御世嗣も　代々の幸い　開けりと

語句の意味

「宜なる（もっともなこと）や
ゆき（幸）のよろし（ちょうどよいこと）も
御世嗣（跡目を相続すること）も
代々（何代も続いているさま）の
幸い（しあわせ）
開けり（始まり、物事の終わり。結末。決着。）」と

天成る道の歌の訳文

　アマテル神（幼名：ウヒルギ、イミ名：ワカヒト）　の生まれは、皆も知っている通り　幸いもなことです。そして、このゆき（幸）の知らせは、ちょうど良いことです。思い起こせば、トヨケ神は日頃より、日の神が生まれられることを、天の御祖に祈らんとトヨケ自ら禊ぎされておりました。その甲斐があって、アマテル神の生まれは、その子、孫がアマカミ（天神）を相続されながら、後に何代にも続いても、アマカミ（天神）の豊かで幸せな世が続いて行くことになる始まりになることでしょう、と。（歌われた）

　そして、待望の天日嗣皇子が生まれられたため、祝いの宴が大夜すがら（一晩中ずっと）の高天に響き渡り、アマテル神の生まれの寿く（ことぶく→めでたいこと）も、三度の夜に及ふことになりました。そして、この祝いがもたらすことは、アマテル神の生まれと云う、幸先のよろしできごとでした。このことは、タミ（民）、トミ（臣）ら人の口々に問わし（問う→知りたいことを尋ねる。）されておりました。そして、その人々の答えにも、また、トヨケの神の教えにもありました。

　そして、その幸先のよい知らせは、イサナミの胎教にも影響を及ぼしておりました。そして、その頃、イサナミの胎教は、差し障る（さしさわりが生じる）ような、意がない空々しいイソラの禊ぎにて、流産の危険にさらされておりましたが、胞衣の囲みは　天御祖神の心のオノコロの玉子とならは、幸よろしでしょうと、御形の円の玉に守られたのでした。その円の玉の岩戸（岩戸の美称）お開けとて（と云って）、一位の花の木より、昔、この一位の木から作ったと云う、謂れを元に作った一位の木の笏を持ちて、「今こそ　開く天の岩屋の戸や」と掛け声を発せられました。すると、早朝の出づる（出流）若日の太陽の輝きに照らされて　ワカヒト（アマテル神）が生まれられたのでした。ワカヒト（アマテル神）の叔母である白山姫は、生まれたばかりのワカヒト（本人は、ウヒルギと発声した）に初めて産湯なす（入浴させられました。）

　保母ナツメの夫であるアカヒコは、桑の小枝の表皮に含まれる繊維状の引く糸お取り出して、保母のナツメが御衣を織りて、生まればかりのウヒルギに初めて着せる産絹のお召しの御衣を奉（る）られたのでした。また、ウヒルギをお産みになられたイサナミの垂乳女の体調が良くないことが知らされると、白山姫の叔母は、イサナミの出産疲れにて乳がでないとことを知るや、乳の出が細けれは、ホイヰの神のミチツ姫の乳を奉り、養す（養い育てる）れどと思案されました。

　そんな中にもウヒルギの皇子は瞳お閉じて、月日を健やかになお過ごされるのでした。そして、やや瞳が周りの景色を捉えることができる十ヶ月を過ごされる頃、今で云うところの中秋の名月の初秋の望の日に、ウヒルギの皇子は目を大きく開（く）かれ、その瞳の目（眼を細めてる）は、民の手拍との大きな喜びに浸られたのでした。その喜びにイサナギ、白山姫の心身の疲れも消ゆる御恵みや（になりました。）

4アヤ(綾)32(3 行)～34(2 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			アメニタナビク		天に棚引く
		シラクモノ	カカルヤミネノ	白雲の	かかるや峰の
		フルアラレ	ヒスミニコタマ	降る霰	日隅にこたま
		コノミヅオ	ヌノモテツクル	このミヅお	衣もて作る
		ヤトヨハタ	ヤスミニタテテ	八豊幡	八隅に立てて
		キミトナル	クラヰノヤマノ	君となる	位の山の
		イチヰサク	ヨニナガラヱテ	一位咲く	世に長らゑて
		サクモツハ	カミノホズヱゾ	笏持つは	神の穂末ぞ

語句の解説

・棚引く→雲や霞かすみなどが横に薄く長く引くような形で空にただよう、

・日隅→ホツマでは、津軽のことだが、この場合は、八隅と対抗する言葉。

・こたま→・樹木に宿っている霊。木精。・山・谷などで起こる音の反響。

・ミヅ(瑞)→みずみずしく美しいこと。若々しく麗しいこと、・八豊幡→八枚の衣製の旗

・八隅→即位式に立る旗の位置、・笏→束帯着用の際、右手に持つ細長い板。

・しらくも-の【白雲の】→[枕]白雲の立ち、または絶える意から、「たつ」「絶ゆ」に掛かる。

・位の山→岐阜県高山市の南西にある山。海抜 1529 メートル。イチイが繁茂する。

・一位→イチイ科の常緑高木。笏(しゃく)の材料としたところから位階の一位にちなむ名。

原文の現在訳

天に棚引く　シラクモノ　カカルヤミネノ　白雲の　かかるや峰の　降る霰　日隅にこたま
このミヅお　衣もて作る　八豊幡　八隅に立てて　君となる　位の山の　一位咲く　世に長らゑて
サ笏持つは　神の穂末ぞ

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

ワカヒト(アマテル神)が生まれて一年が経とうとした初冬の天の原では、ワカヒト(アマテル神)の一歳の誕生日を祝うように、天の空に棚引く薄雲が長く連なっておりました。また、時として、白雲の立ち、その下では暖気が山々にかかるや、峰の山頂を超える寒風に冷やされた雨水が降るや、霰になって日隅にこたまします。この時の霰が染み込んだミヅ(瑞⇒みずみずしく美しいこと)お衣もて作られる八豊幡が、天の原の八隅に立てられて、ワカヒト(アマテル神)の皇子はアマカミ(天神)の君となる(なられました。) また、君となられたワカヒト(アマテル神)には、笏が授けられ、そして、位の山の一位の白い花が咲く一位の木は、世に長らゑて育つ木であり、この木で作った笏を持つワカヒト(アマテル神)君は、天御祖神の穂末ぞ(天御祖神の直系の神を授けられました。)

4アヤ(綾)34(3 行)～37(4 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		オバヒメガ	コヱネノクニニ	伯母姫が	コヱネの国に
		ミハヲリテ	タテマツルトキ	御衣織りて	奉る時
		ナクミコノ	コヱキキトレハ	泣く御子の	聞きとれは
		アナウレシ	コレヨリモロガ	あな嬉しい	これより諸が
		ナオコイテ	オバヨリトエハ	名お請いて	伯母より問えは
		ウヒルギト	ミツカラコトフ	ウヒルギと	自ら答ふ
		ミコノコヱ	キキルトキハ	御子の声	聞きる時は
		オサナナノ	ウハオオイナリ	幼な名の	ウは大いなり
		ヒハヒノワ	ルハヒノチタマ	ヒは日の輪	ルは日の霊魂
		ギハキネゾ	カレウヒルギノ	ギはキネぞ	故、ウヒルギの
		ミコトナリ	キネハメオトノ	尊なり	キネは夫婦の
		オノキミゾ	フタカミオバオ	男の君ぞ	二神伯母お
		タタヱマス	キクキリヒメモ	称えます	キクキリ姫も
		アナカシコカナ		あなかしこかな	

語句の解説

・伯母姫→白山姫、・コヱネの国→コヱ国のネ国、・御衣→お召し物、・ウヒルギ→ワカヒトの生れ名

・キネのネ→「ネ」のみの意味は「夫婦の君ぞ」になる。(詳細は、疑問に解説あり)、

・あなかしこ→ああ、恐れ多い。

原文の現在訳

伯母姫が　コヱネの国に　御衣織りて　奉る時　泣く御子の　声聞きとれは　あな嬉しい　これより諸が　名お請いて　伯母より問えは　ウヒルギと　自ら答ふ　御子の声　聞きる時は　幼な名の　ウは大いなり　ヒは日の輪　ルは日の霊魂　ギはキネぞ　故、ウヒルギの　尊なり　キネは夫婦の　男の君ぞ　二神伯母お　称えます　キクキリ姫も　あなかしこかな

【疑問】

4アヤ(綾)36～7に、「ギはキネぞ」 、「キネは夫婦の　男の君ぞ」との記述がありますが、「キネ」の「ネ」には、どんな意味がありますか。また、 その根拠となる記述はありますか。

【疑問に応える】

ホツマツタヱの全アヤ(綾)を調べて見ましたが、「キネ」の「ネ」を直接解説した記述は、ありませんでした。そのため、「ギ」、「キネ」の使用例より考察を加えながら解説して見たいと思います。

【キ】
　まず、「キ」です。2アヤ(綾)10に、「オカミはキ(男神は木)　メカミはミとぞ(女神は実とぞ)」があり、「キ」は、男神と述べております。

【ギ】
　次に、「ギ」です。　4アヤ(綾)36には、「ギはキネぞ」　があります。そうすると、「ギ」と「キネ」を「は」で繋いでいるため、「ギ」と「キネ」の意味は同じと解釈されます。そうすると、アマテル神の幼な名の「ウヒルギ」は、「ウヒルギ(キネ)」と読み替えができるようです。

【キネ_1】
　次に、「キネ」です。　4アヤ(綾)37に、「キネは夫婦の　男の君ぞ」があります。だが、直接に「ネ」の意味が記述されておりません。

【ヒト、キネ、ヒコ】
ヒト
　そこで、4アヤ(綾)48を見ますと、実名をイミ名と称える記述の個所において、「ヒト」の名の謂われを「天つ君　ヒ(一)よりト(十)までお尽くす故　ヒト(一・十→仁)に乗ります」と記述しており、長男子に付与されるようです。また、「キネとヒコ　氏も乗りなり」と記述しております。

【キネ_2】
　また、「キネ」を一音節で表現すると、「キ」は東、「ネ」は北になります。そのため、「キネ」は、「キツサネ(東西南北)」の「キからネ(東から北)」とも受け取れます。だが、先の4アヤ(綾)37の「キネは夫婦の　男の君ぞ」からは、「キネ」は方角でないことになります。

【ヒコ】
　また、「ヒコ」は、ヒ(一)よりコ(九)までお　尽くす故、君以外の「キネ」の次の男子の名に付与されているようです。

【ヒト、ギ、ヒコの事例】
　その代表例として、ニニキネの三人の皇子のイミ名を見ると、ヒト→ギ→キネの順であり、
長男-ムメヒト、次男-サクラギ、三男-ウツキネと記述されています。
　なお、アマテル神の皇子は、長男-タナヒト、次男-ヲシヒト、三男-タダキネ、四男-バラキネとなり、ヒト→キネの順であるが、二名つづでした。また、ヲシヒト尊の皇子は、長男-テルヒコ、次男-キヨヒトに記述されており、ヒトとヒコが順序が逆でした。
　以上、ホツマツタヱの文章の記述より、「キネ」の「ネ」について、調査して来ましたが、記述からは、「ネ」の直接の意味は解読できませんでした。

【キネのネの意味の考察】

そこで、改めて、「キネ」の「ネ」の意味について、ホツマツタヱの文章より考えて見ました。抽出した文章は、「キネ」、「キ」の文章の（1）4アヤ（綾）37の「キネは夫婦の　男の君ぞ」の文章と、（2）2アヤ（綾）10の「オカミはキ（男神は木）」になります。

そして、「キネ」の「ネ」の意味を求めるため、（1）の文章より（2）の文章の共通する語句を差し引くことにします。そこで残った文章は、「ネは夫婦の君」になるようです。このように、残された文章を良く見ますと、「ネ」の意味は「夫婦の君ぞ」と教えてくれるようです。

【ネの解読式】

（1）キネは夫婦の　男の君ぞ
　　↓　　↓
（2）男神はキ（木）　　↓
　↑　　↓
　└← ← ← ← ← ←┴

【ネの答え】

（式）

（1）－（2）　＝　ネは夫婦の君ぞ　　（吉田説）

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

イサナギの姉であり、後のアマテル神の伯母の白山姫が、コヱ国（関西・中部地区）のネ（北陸地方）の国に嫁いでおられましたが、御子が生まれるとのことでネの国よりハラミ山の麓の天の原に来られておりました。そもそも白山姫が嫁がれたネの国は養蚕が盛んな国です。アカヒコは妻のナツメと一緒に白山姫を助けて、初夏～秋にかけて養蚕を行っておりました。

蚕の養育方法は古代より変わりなく、蚕を卵からふ化させ、朝夕に新しい桑の葉を与えてながら4回の脱皮を繰り返させます。約1ヶ月近くになると、蚕は口より糸を吐いてまゆ（繭）を作り始め、3日くらいでまゆ（繭）が終わります。生糸を取り出す方法は、まゆ（繭）を数個、お湯に入れてまゆ（繭）の表面の蚕の糊を解しながら、ホウキでまゆ（繭）の周りをゆっくり回しますと、まゆ（繭）の糸の端がホウキに絡んで来ます。この絡んだ生糸を、別に用意した桑の枝（現在の糸巻き）に3～5本の糸を絡めて、ゆっくり桑の木の糸巻きを回転させて行きますと、まゆ（繭）が踊りながらどんどんと糸が巻きついて行きます。

最後にサナギが現れることで糸巻きが終わります。このようにして、まゆ（繭）より巻かれた糸が生糸です。そして、アカヒコの妻のナツメの手により御衣（お召し物）の絹の反物（注記）を織りて、白山姫の伯母より若日に生まれた御子（後のウヒルギ）に奉られる時でした。

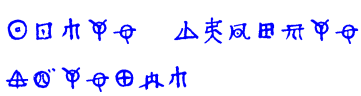
（注記）御衣織りて

直訳すると「お召し物を織る」と訳されることから、当時は、「生糸より織って、現在で云うところの絹の反物をそのまま、お召し物とて身に付けていた」ことが推定されます。

泣く泣く御子は、自分の名を告げられていたが、その声は小さく、鳴き声に入り混じって聞きにくかった。それでも伯母姫は、耳聡く（聴覚がするどい）御子の名を聞きとれば、あな嬉しいと喜ばれました。これまで御子より諸が、御子の名お請いても答えなかったものが、伯母が御子より名を問えは、ウヒルギと自ら答ふ（答えられたと云うことであった。） このようにして、伯母の白山姫が御子の声を聞きとれる時、御子は、自らの幼な名の意味を話され、その元の意味になっていたのは、天御祖神が降りて来て、勅りされるよう壮大な意味であった。そして、御子の名は「ウヒルギ」と云い、「ウは大いなり　ヒは日の輪　ルは日の霊魂　ギはキネぞ　故（ゆえに。だから。）ウヒルギの尊となり（云いました。）」

そして、伯母姫の白山姫は、ウヒルギの幼な名に含まれる「ギはキネぞ」のキネについて、解説されました。その伯母姫の云うことには、「キネは、夫婦の　男の君ぞ」とのことです。だが、その「キネ」の「キ」は、ホツマツタヱには、男神と記述されておりますが、「キネ」の「ネ」については、記述されておりませんでした。そこで、筆者が伯母姫に代わって解説しますと、「ネ」は「夫婦の君」を云うことがわかって来ました。そして、イサナギ、イサナミの二神は、皇子の幼な名を聞ききったため、伯母おキククリ姫と称えます。 キクキリ姫も　あなかしこ（ああ、恐れ多い。） ことかな（軽い詠嘆の気持ちを込めた疑問の意を表す。）

4アヤ（綾）38（1～3 行）【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳
	アカタマノ　ワカヒルノルハ	赤玉の　若日霊の霊は
	アオキタマ　クレヒノミタマ	青き玉　暮れ日の御玉
	ヌバタマナリキ	射干玉なりき

語句の解説

・「赤玉～なりき」までの文章→この部分の文章は、「五七五七七」の短歌で詠まれていた。

・ヌバタマ→射干玉→ヒオウギの種子。丸くて黒い。うばたま。むばたま。

原文の現在訳

赤玉の　若日霊の霊は　青き玉　暮れ日の御玉　射干玉なりき

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

キクキリ姫より「幼な名」を尋ねられた皇子であるが、その皇子から発する霊力の大きさに魅せられたキクキリ姫は、御子（ウヒルギ）を最大限に形容されて、日の御子であることを短歌されて詠み上げられたのでした。

短歌

赤玉の　若日霊の霊は　青き玉　暮れ日の御玉　射干玉なりき

短歌の訳文

赤玉の後光を発する若日霊（ウヒルギ）の霊は、その威光が無限の時の青き玉のようであり、また、西に沈む時の暮れ日の御玉に似て、太陽の外周のコロナ（白色）の影となり、若日霊（太陽）そのものは真黒な射干玉（黒く丸い実）なりき（のようにみえるようでした。）

4アヤ（綾）38（3 行）～40（2 行）【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		ヒサカタノ	ヒカリアレマス	久方の	光生れます
		ウイナメヱ	アユキワスキニ	初嘗会	アユキ、ワスキに
		ツゲマツリ	ミコヒタサント	告げ祭り	御子養さんと
		フタカミノ	ミココロツクス	両神の	御心尽くす
		アマノハラ	ソムホヰマスモ	天の原	十六穂居ますも
		ヒトヒトゾ	オボスハメクミ	一日とぞ	オボスは恵み
		アツキナリ		篤きなり	

語句の解説

・初嘗→生まれて皇子が初めて穀物を食すること。

・新嘗祭→秋に新しくとれた穀物を神に供えて天皇みずからもそれを食べること。

・大嘗祭→即位後最初の新嘗祭、・篤い→重い

・オボス→思す→「おもほす」の音変化》「思う」の尊敬語。お思いになる。

・十六穂居ますも一日とぞ（注記）分析結果、一日の長さをスス暦の基準となる「穂」で表した値（穂）

（注記）十六穂居ますも一日とぞ

「十六穂居ますも　一日とぞ」の文章は、「アヱよりヤヱ」の法則より成り立つホツマのヤマト言葉であり、「1日の長さを、鈴暦の16穂で計算していた」との意味です。だが、一部のホツマ研究者は、支那より渡来の**四文字熟語の**「十年一日の如し」を当て嵌めておりますが、「それは間違い」です。

辞書より引用

・しんじょう-さい〔シンジヤウ-〕【新×嘗祭】

天皇が新穀を天神地祇(ちぎ)に供え、みずからもそれを食する祭儀。古くは陰暦 11 月の中の卯(う)の日、明治 6 年(1873)以降は 11 月 23 日と定めて祭日としたが、昭和 23 年(1948)からは「勤労感謝の日」となり、国民の祝日となっている。にいなめさい。《季 冬》

・にいなめ-さい〔にひなめ-〕【新×嘗祭】

「しんじょうさい(新嘗祭)」に同じ。

・だいじょうさい【大嘗祭】 おおなめまつり

天皇の即位後最初の新嘗祭しんじようさい。一代一度の祭事。おおなめまつり。おおにえのまつり

・悠紀(ゆき)・主基(すき)

大嘗祭が行われる年には、まず、所司(官司の役人)が、その祭に供える稲を出す斎田を選ぶため、悠紀(ゆき)・主基(すき)の国・郡を卜定(ぼくじょう)する。悠紀・主基の国を斎国(いつきのくに)という。悠紀は東日本、主基は西日本から選ばれるのを原則とし、畿内の国(山城国・大和国・河内国・和泉国・摂津国の令制 5 か国(現在の京都府、奈良県及び大阪府))から選ばれたことは一度もない[3]。宇多天皇以降は、近江国が悠紀、丹波国と備中国(冷泉天皇の時のみ播磨国)が交互に主基とされ、その国の中で郡を卜定した。

・さいでん【斎田】

①神饌しんせんに用いる米を栽培する田。

②大嘗祭だいじようさいに供進する御酒・御饌の料となる新穀を作る田。悠紀ゆき・主基すきの両田。

・ゆき - でん【▽悠紀殿】

大嘗祭(だいじょうさい)のとき、東方の祭場となる殿舎。→主基殿(すきでん)

・すき - でん【主基殿】

大嘗祭(だいじょうさい)のとき、西方の祭場となる殿舎。主基。→悠紀(ゆき)殿

原文の現在訳

久方の　光生れます　初嘗会　アユキ、ワスキに　告げ祭り　御子養さんと　両神の　御心尽くす　天の原　十六穂居ますも　一日とぞ　オボスは恵み　篤きなり

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

久方の光と共にア（生）れますウヒルギ御子。生まれたばかりの天日嗣の御子が初めて穀物を供え、食する祭儀の初嘗会の斉場には、赤玉の若日霊の霊が差し込む「キ（東）」の方向にアユキの宮が造られ、「九星のアメノミナカヌシの1神とトホカミエヒタメの8神」を祭られました。また、暮れ日の御玉の落つる「ツ（西）」の方向のワスキ殿には、「ウマシアシガイヒコチ神の11神（キツヲサネの5神とアミヤシナウの6神）が祭られました。そして、天上の元明けの天御祖神に、天日嗣の御子のウヒルギの誕生を告げ祭りが奉納され、初嘗会を経てウヒルギの御子は、天御祖神の信任を受けて、アマキミ（天君）の皇子になられたのでした。

そして、ウヒルギ御子を養さんと二神のイサナギ・イサナミは、御心尽くす寵愛をされ天の原の一日が過ぎて行きます。天の原での一日は、スス暦において、「1日を16穂」で数えており、「十六穂居ますも　僅か一日とぞ（一日のことになります。）」 そのような二神のオボス（お思いになられる）は恵みも伴に篤きことなり。

アユキ、ワスキ

ミカサフミ「三笠文　高天成る文」より引用すると、

ヤマクイの	高天お請えは
草難て	九星お祭る
ユキの宮	天常立（神）と
スキ殿に	ウマシアシガイ
ヒコチ神	併せ祭れは
名も高天	諸　集まりて

4アヤ（綾）40（2 行）～45（2 行）【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			ムカシタマキネ		昔、タマキネ
		チカイシテ	カツラキヤマノ	誓いして	葛城山の
		ヤチミソギ	スミテイトリノ	八千禊ぎ	住みてイトリの
		テクルマオ	ツクリカツラノ	手車お	作りカツラの
		ムカヒトテ	ハラミニツタフ	迎ひとて	ハラミに伝ふ
		アルカタチ	フタカミユメノ	ある形	二神夢の
		ココチニテ	アヒミタマエハ	心地にて	相見給えは
		トヨケニテ	アメミコヒタス	トヨケにて	天御子養す
		モノカタリ	メステクルマオ	物語り	召す手車お

		ヒタカミヱ	ミユキノキミハ	日高見ゑ	御幸の君は
		ヤフサコシ	チツモハヘル	八房輿	オチツも侍る
		ケタコシモ	ミナケタツホノ	ケタコシも	みなケタツホの
		ヤマテミヤ	ミコノヒカリノ	ヤマテ宮	御子の光の
		テリトホリ	ヤモニコカネノ	照り徹り	八方に黄金の
		ハナサケハ	ヒノワカミヤノ	花咲けは	日の若宮の
		ワカヒトト	トヨケイミナオ	ワカヒトと	トヨケヰミナお
		タテマツル	フタカミオソレ	奉る	両神畏れ
		ワガミヤニ	ムベソタチジト	わが宮に	むべ育てと
		アメニアゲ	オキツノミヤニ	天に上げ	沖つの宮に
		カエリマス	アメミコマナブ	帰れます	天御子学ぶ
		アメノミチ	ヒトリハンヘル	天の道	一人侍る

語句の解説

・葛城山→日高見の葛城山？、・八千→数がきわめて多いこと、多く語の上に付けた複合語、
・手車→手で押したり引いたりして動かす小形の車、・桂→カツラ科の落葉高木、
・ハラミ→ハラミの政庁のこと、・心地→心持ち、気持、気分良く、・相見→会うこと、対面すること、
・君→トヨケ（タマキネ）、・八房輿→八つの房をもつ輿、・輿→何人か担いで運ぶ乗物、
・ケタコシ→方越か、・八方→四方と四隅、・日の若宮→ワカヒトのこと、
・ケタツホ→方壺→国の中心地→日高見国の政治の中心地（政庁）、古代ではヤマテ宮と云った。
・黄金の花咲け→黄金の出ることを花が咲くのにたとえて云う。
・ワカヒト→日高見のヤマト宮にて、トヨケが奉ったのヰミナを云う、・奉る→献上する、
・沖つの宮→沖壺の宮→近江→イサナギ、イサナミが住んだ宮、
・宜→「うべ」に同じ。《平安時代以降は「むべ」と表記されることが多い》肯定する気持ちを表す。なるほど。いかにも。
・畏れ→畏敬の念、・天御子→ワカヒト、・天の道→天神になるための道、

辞書より引用

てぐるま【手車・輦・輦車】

① 手で押したり引いたりして動かす小形の車。 ② 土砂などを運ぶ二本の柄のついた小形の一輪車。猫車ねこぐるま。③ 自家用の人力車。?④ 二人が向かい合って両腕を組み合わせ、その上に人を乗せて運ぶこと。あと省略。大辞林 第三版の解説

原文の現在訳

昔、タマキネ　誓いして　葛城山の　八千禊ぎ　住みてイトリの　手車お　作りカツラの　迎ひとて　ハラミに伝ふ　ある形　二神夢の　心地にて　相見給えは　トヨケにて　天御子養す　物語り　召す手車お　日高見ゑ　御幸の君は　八房輿　オチツも侍る　ケタコシも　みなケタツホの　ヤマテ宮　御子の光の　照り徹り　八方に黄金の　花咲けは　日の若宮の　ワカヒトと　トヨケ丰ミナお　奉る　両神畏れ　わが宮に　むべ育てと　アメ天に上げ　沖つの宮に　帰れます　天御子学ぶ　ア天の道　一人侍る

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

そう云えば、ウヒルギの母方（イサナミの父）のお祖父に当たるタマキネ（トヨケ）の話になりますが、「昔、タマキネは、天御祖神にお誓いをして葛城山の中腹～山頂にかけて八千（数がきわめて多いこと）の禊ぎをされるや葛城山にお住みになられておりました。そして、ウヒルギの御子がハラミの宮で生まれられます。その誕生の知らせを山中のタマキネに届けると、同時に、タマキネを葛城山より車で迎えに行くことを議られるや、イトリ（丹頂鶴）の模様を装飾した手車を（手で押したり引いたりして動かす小形の車。）お作りになり、カツラ山へと迎ひに行くことと（と思って）、イサナギ、イサナミのお住まいがあるハラミの宮に伝（ふ）えられました。

その話をお聞きになったイサナギ、イサナミは、トヨケのある形（実際のありさま）のご様子を想像されておりました。そして、　イサナギ、イサナミの二神と、久しぶりに祖父のトヨケと会える楽しみの夢の心地（心持ち、気持）にて、相見（対面）を給えは（給われました。）

トヨケの祖父と云えば、日高見にてウヒルギの天御子を養す物語りが苞に有名です。「二神は、ウヒルギを召す（乗せられた）手車お日高見のヤマト宮ゑと送り届けられます。葛城山へと御幸のトヨケ君は、八房輿（何人かで担いで運ぶ八つの房を備えた乗物）に乗って、日高見へと向かわれ、日高見の入り口のケタコシ（地名）にて、オチツ姫が侍る。（かしこまってその場に待っておられました。）

そのオチツ姫が侍る地のケタコシも、皆、日高見国の政治の中心地（政庁）であるケタツホ（方壺）のヤマテ宮の内になります。そして、ヤマテ宮ではのウヒルギ御子の若日霊の光の照り徹りさまは、四方と四隅の八方に黄金の花咲け（黄金の出ることを、花が咲くのに譬えて云うこと）る様子は、日の神の若宮のことと称する名前のワカヒト皇子と、トヨケの祖父は丰ミナお　ウヒルギ御子に奉（る）られました。

ワカヒトのイミナの位は、日の神より授けられる若宮であるため、イサナギ、イサナミの二神は畏敬の念により畏れられました。そして、わがヤマテ宮において勉強されて、むべ育てと、日高見の天の原に上げられました。その後、しばらくして、イサナギ、イサナミの二神は、現在、二人が住まわれている近江の沖つの宮に帰れます。ワカヒトの天御子は、日高見のヤマテ宮で一人トヨケに学（ぶ）ばれ、天御祖神より続く天成るの道を取得されるやトヨケの傍に一人でに侍る（従っておられました。お使えしておられました。）

4アヤ(綾)45(3 行)～46(3 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		フリマロハ	ムヨヤソキネノ	フリマロは	六代ヤソキネの
		ヨツギコゾ	タカミムスビノ	世嗣子ぞ	タカミムスビの
		ヰツヨギミ	ヒコトニノホル	五代君	日毎に登る
		アマツミヤ	ワカヒトフカク	天つ宮	ワカヒト深く
		ミチオホス		道お欲す	

語句の解説

・ヤソキネ→トヨケの子、・五代君→五代目のトヨケ、

・天つ宮→日高見のヤマテ宮の中にある宮の一つ

原文の現在訳

フリマロは　六代ヤソキネの　世嗣子ぞ　タカミムスビの　五代君　日毎に登る　天つ宮　ワカヒト深く　道お欲す

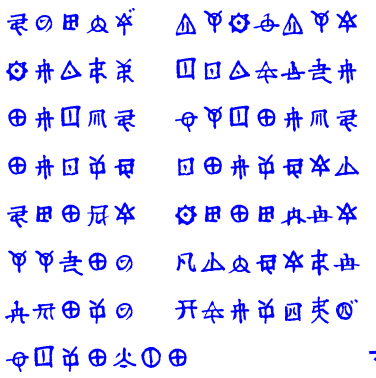
解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

フリマロはトヨケの孫であり、六代タカミムスビのヤソキネの世嗣子ですぞ。 そのフリマロの祖父であるタカミムスビの五代のトヨケ君は、日毎にヤマテ宮に登ることを日課にされて、ヤマテ宮の天つ宮で一人待るワカヒトの皇子に天成る道を御進講されました。その教えにワカヒトの皇子は、何度となく御質問されるや、深く天成る道の真髄お教えて下さい欲すと（望まれました。）

ホツマツタヱ本文

4アヤ(綾)46(3 行)～50(3 行)【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			アルヒノトヒニ		ある日の問いに
		マコトナオ	ヰミナトタタヱ	実名お	ヰミナと称ゑ
		アネニミツ	ワレハヨツナリ	姉に三つ	われは四つなり
		コレイカン	タマキネイワク	これ如何	タマキネ曰く
		ヰミナニハ	タラニヨツギニ	ヰミナには	タラに世嗣に
		ナトノリト	アワセヨツナリ	名とのりと	合せ四つなり
		アマツキミ	ヒヨリトマデオ	天つ君	一より十までお
		ツクスユヱ	ヒトナノリマス	尽くす故	ヒトにのります
		キネトヒコ	ウシモノリナリ	杵と彦	氏ものりなり



メハノラズ　フタオヤフタツ　女はのらず　両親二つ
オニウケテ　コオウムユヱニ　男に受けて　子お生む故に
ナニコヒメ　マタコナニヒメ　何子姫　また子何姫
ナニオトモ　オナニトモツク　何おとも　お何とも付く
メノナミツ　オノナノリヨツ　女の名三つ　男の名のり四つ
タタヱナハ　イクラモツケヨ　称ゑ名は　幾らも付けよ
ヰミナトハ　シムニトホレバ　ヰミナは　シムに徹れば
マコトナルカナ　真なるかな

語句の解説

・ヰミナ→実名のことを云った、・タラ→垂乳根→母・母親、・のり(疑問に解説あり)、
・天つ君→ワカヒト君、・ヒト→仁→天皇のヰミナ、・尽くす→ある限りして上げる、
・杵と彦→〇杵、〇彦　、・シム→血脈

原文の現在訳

アルヒノトヒニ　ある日の問いに　マコトナオ　ヰミナトタタヱ　実名お　ヰミナと称ゑ　アネニミツ　ワレハヨツナリ　姉に三つ　われは四つなり　コレイカン　タマキネイワク　これ如何　タマキネ曰く　ヰミナニハ　タラニヨツギニ　ヰミナには　タラに世嗣に　ナトノリト　アワセヨツナリ　名とのりと　合せ四つなり　アマツキミ　ヒヨリトマデオ　天つ君　一より十までお　ツクスユヱ　ヒトナノリマス　尽くす故　ヒトにのります　キネトヒコ　ウシモノリナリ　杵と彦　氏ものりなり　メハノラズ　フタオヤフタツ　女はのらず　両親二つ　オニウケテ　コオウムユヱニ　男に受けて　子お生む故に　ナニコヒメ　マタコナニヒメ　何子姫　また子何姫　ナニオトモ　オナニトモツク　何おとも　お何とも付く　メノナミツ　オノナノリヨツ　女の名三つ　男の名のり四つ　タタヱナハ　イクラモツケヨ　称ゑ名は　幾らも付けよ　ヰミナトハ　シムニトホレバ　ヰミナは　シムに徹れば　マコトナルカナ　真なるかな

【疑問】

ワカヒト皇子のある日の問いに、タマキネは次のように答えておりますが、その時に五つの「のり」で説明されておりますその「のり」の意味を教えて下さい。

問

実名お　ヰミナと称ゑ　姉に三つ　われは四つなり　これ如何

答

ヰミナには　タラに世嗣に　名とのりと　合せ四つなり　天つ君　一より十までお　尽くす故
ヒトにのります　杵と彦　氏ものりなり　女はのらず　両親二つ　男に受けて　子お生む故に
何子姫　また子何姫　何おとも　お何とも付く　女の名三つ　男の名のり四つ　称ゑ名は
幾らも付けよ　ヰミナは　シムに徹れば　真なるかな

【疑問に応える】

(1)現在の辞書より考える。

「のり」の意味を辞書より引用しますと、のり(乗り)、のり(法・則・矩)が見出されるようです。そして、この「のり(乗り、法・則・矩)」を、タマキネが答えた文章「ヰミナには　タラ(両親)に世嗣に　名とのり(乗り、法・則・矩)と　合せ四つなり」に当て嵌めて見ました。すると、「名とのり」には、乗り(乗り物)、法(法則)、則(規則)、矩(直線)は適用できないようです。

(2)タマキネの文章より考える。

もう一度、「ヰミナには　タラ(両親)に世嗣に　名とのりと　合せ四つなり」の文章を原点に還り考えて見ました。すると、「タラ(両親)に世嗣に」と「名とのり」は、相対する文章のようです。そこで、云い方を変えて見ますと、「タラ(両親)に名と」、「世嗣にのり」と述べているようです。そうしますと、二つの文章の後に「付けてもらう」の言葉を添えますと、「タラ(両親)に名と付けてもらう」、「世嗣にのり付けてもらう」になります。

このように考えて来ますと、「ヰミナには　タラ(両親)に世嗣に　名とのりと」の次の文章である「合せ四つなり」の四文字のヰミナの数は、前の二文字は「タラ(両親)に名を付けてもらい」、後の二文字は「世嗣にのりを付けてもらう」と解釈できるようです。また、世嗣の意味は前代より世襲される名付けの法則と云えるようです。

そして、その「のり」は、長男の場合は「ヒ(一)」から「ト(十)」までを表す「ヒト」と名付け、次男以降は「ト(十)」より「ヒ(一)」少ない「ヒ(一)」から「コ(九)」までを表す「ヒコ」と名付けると推定されるようです。また、「キネ(杵)とヒコ(彦)」のキネ(杵)の意味は、4アヤ(綾)36に記述されており、「キネは夫婦の男の君ぞ」に付ける「のり」であったようです。

そして、その「のり」の意味は、「キネ(杵)とヒコ(彦)　氏ものりなり」と記述している所から、氏もキネ(杵)とヒコ(彦)と同様に、「世嗣にのりを付けてもらう」また、「世嗣の意味は前代より世襲される名付けの法則」から来る氏のイミナと云えるようです。

結論

「のり」とは、ヒト(仁)、キネ(キネ)、ヒコ(彦)のように、ある法則、世襲により決まった氏を付けてもらうことを「のり」と云う。平たく云えば、「名のり」、「名乗る」と云えば、現在語にも繋がっている言葉であることがわかって来ます。

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

ある日のワカヒコの問いの一駒に、女と男のイミナの違いをタマキネに尋ねられておりました。「マコト（実）名お斗ミナと称ゑると云うことですが、姉に三つ文字われは四つ文字になります。これの理由はイカン（如何なることでしょうか）。」そのワカヒトのご質問に、タマキネは次のよう曰く（申されました）。

斗ミナの付け方には、生まれた時にタラ（両親）に名付けてもらう場合と、世嗣の時に世襲名として名付けてもらう場合の二つになります。タラが付ける名とある法則名、または、世襲からの名のりとを合せて、四つの文字になり、国家を治める天つ君（アマキミ）は、すべてを知り尽くしていると云う意味のヒ（一）よりト（十）までのすべておトミ（臣）、タミ（民）らに尽くすことになります。故に、ヒト（人）に乗ります。そのため、イサナギはタカヒト。アマテル神はワカヒトに名付けられております。また、キネ（杵）とは、夫婦の男の君を云います。また、ヒコ（彦）とは、アマキミ（天君）のヒト（人）より一つ及ばないが、ヒコ（一～九）まで尽くすとしてヒコ（彦）と名付けられます。そして、氏もキネ、ヒコと同様に世襲名を名のりなるなり。

だが、女は名のらず（名のりません。）そのため、両親は二つ名を用意しているものです。そして、男に日霊を受けて子お生む故に、女の子の名はなにコ姫、またコ、なに姫、男の子はなにオとも、またオなにとも付く（付けます。）

女の名は名のらないため三つ文字、男の名は名のり名を付けるため四つ文字にします。そして、功績などをほめたたえて呼ぶ称ゑ名は幾らも付けよ。斗ミナ（真名）はシム（血脈）に徹れば　まこと（純粋）な血筋となるかな

（四アヤ（綾）　おわり）